

永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2018 年 9 月

「恐れるな、小さい群れよ」「預言の確かな言葉（Ⅱ）」「第三天使のメッセージそのもの」「きゅうりの韓国風サラダ」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

預言の確かな言葉(Ⅱ)

4

聖書の教え

朝のマナ

恐れるな、小さい群れよ

9

Fear Not, Little Flock

現代の真理

「第三天使のメッセージそのもの」

40

神の憐れみの最後の招き

力を得るための食事

きゅうりの韓国風サラダ

46

お話コーナー

「過越(すぎこし)の夕食にて(Ⅰ)」

48

【正丸教会】

〒368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465 FAX：0494-40-1045

【高知集会所】

〒780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2
電話：088-831-9535

【沖縄集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

アクセス www.4angels.jp

メール support@4angels.jp

発行日 2018 年 8 月 5 日

編集&発行 SDA 改革運動日本ミッション

〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Getty images on Front page, Sermon View
on page 40

目を地上から離してイエスを見上げているかぎり

わたしは、ひとりの天使が、「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである」と叫ぶのを聞いた。その時、…彼らは、非常な関心をもってイエスを仰ぎ見、「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである」という天使の声に合わせて、彼らの声をあげていた。…

やがて、…彼らが救い主を期待した時は過ぎてしまい、イエスは来られなかった。彼らが失望に陥ったときに、…別の天使が「倒れた、大いなるバビロンは倒れた」というのを聞いた。失望した人々に光が輝いた。彼らは、イエスの現れを熱望して、ふたたび彼らの目をイエスに向けた。…

他方では、サタンとその天使たちが、彼らの回りを暗黒でおおい、天からの光を彼らに拒否させようとしていた。…そして、わたしは、祈っていた人々が、すでに自由を得て神にあつて喜びを味わっている一団の人々に手を伸ばし、助けを求めているのを見た。すると彼らは、熱心に天を仰ぎ、天を指さして、「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ」と答えるのであった。…

与えられた光を受け入れた者はみな、非常な熱心をもって天を仰いでいた。…彼らは、イエスが来られるのを期待し、その出現を待望していた。彼らは、地上の方には少しも目を向けなかった。しかし、ふたたび、雲が、待ち望んでいる人々をおおった。そして、わたしは、彼らが、疲れた目を地上に向けるのを見た。…(初代文集 394-399)

イエスは、聖所における奉仕を終わり、至聖所にはいつて、神の律法を納めた箱の前に立たれたときに、世界に対する第三の使命をたずさえたもうひとりの力強い天使を、お送りになった。…第三の天使は、「ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある」と言って、メッセージを終わっている。彼は、この言葉を繰り返したときに、天の聖所を指さした。このメッセージを信じるすべての者の心は、至聖所に向けられる。(初代文集 414)

わたしは、サタンと彼の天使たちが、神の民をこの天来の光から遮断しようとしているのを見た。しかし、待望している人々が、光を心に抱いて、彼らの目を地上から離してイエスを見上げているかぎり、サタンは、この尊い光を彼らから奪うことができなかった。(初代文集 407)

愛する兄弟姉妹がた、神の戒めとイエス・キリストのあかしを常に心に抱いていよう。そして、それに世の思いと傾いを閉め出していただく。寝る時も起きる時もこれを瞑想しよう。人の子の来られることを常に考えて生活し、すべての行動をとろう。(初代文集 130)

天の王国の市民である者は、絶えず見えない事柄を見ている。思いや品性に及ぼす地上の力は打ち破られている。…「わたしもその人を愛し、その人にわたし自身をあらわすであろう」(ヨハネ 14:21)。(天国で 85)

第6課 預言の確かな言葉(Ⅱ)

無神論者に対する挑戦

聖書全体は、真実に基づいています。預言こそ、神聖な啓示の最も明白で決定的な証拠です。「こうして、預言の言葉は、わたしたちにいつそう、確かなものになった。あなたがたも、夜が明け、明星がのぼって、あなたがたの心を照らすまで、この預言の言葉を暗闇に輝く灯として、それに目をとめているがよい」(ペテロ第二 1:19)。

神は、無神論者と偽預言者に対し、預言を示してその預言を実現させよと要求なさいます。「それを持ってきて、起るべき事をわれわれに告げよ。さきの事どもの何であるかを告げよ。われわれはよく考えて、その結末を知ろう。あるいはきたるべき事をわれわれに聞かせよ。この後きたるべき事をわれわれに告げよ。われわれはあなたがたが神であることを知るであろう。幸をくだし、あるいは災をくだせ。われわれは驚いて肝をつぶすであろう」(イザヤ 41:22, 23)。

「いにしえよりこのかたの事をおぼえよ。わたしは神である、わたしのほかに神はない。わたしは神である、わたしと等しい者はない。わたしは終りの事を初めから告げ、まだなされない事を昔から告げて言う、『わたしの計りごとは必ず成り、わが目的をことごとくなし遂げる』と。」(イザヤ 46:9, 10)。

「わたしはさきに成った事を、いにしえから告げた。わたしは口から出して彼らに知らせた。わたしは、にわかにかの事を行い、そして成った。…いにしえから、かの事をあなたに告げ、その成らないさきに、これをあなたに聞かせた」(イザヤ 48:3, 5)。

偉大な都市、王国および出来事について数多くの驚くべき預言がなされ、それらは正確に成就してきたのです。

ツロ

古代の貿易都市であるツロは、フェニキア人にとって誇りでした。聖書の中でこの町に関する預言が記されています。

「それゆえ、主なる神はこう言われる、ツロよ、わたしはあなたを攻め、海がその波を起すように、わたしは多くの国民を、あなたに攻めこさせる。彼らはツロの城壁をこわし、そのやぐらを倒す。わたしはその土を払い去って、裸の岩にする。ツロは海の中であって、網をはる場所になる。これはわたしが言ったのであると、

主なる神は言われる。ツロは、もろもろの民にかすめられ」（エゼキエル 26:3-5）。

数多くの国が海の波のように、次から次へとツロを襲うということに注目してください。歴史は、ツロが諸外国の軍隊によって攻撃された 1500 年以上にわたる期間について記録しています。第 7 節には、次のように記されています。「主なる神はこう言われる、見よ、わたしは王の王なるバビロンの王ネブカデザルに、馬、戦車、騎兵、および多くの軍勢をひきいて、北からツロに攻めこさせる」（エゼキエル 26:7）。

ここで、王の名前、その王国、およびその王の攻撃方法が預言されています。これらは文字通りに成就しました。ツロは、二つの地域において建設されました。一つは本土の上で建設され、もう一つの残りは 0.5 マイルほど海の中に入ったところにある島の上に建てられました。ネブカデネザル王は紀元前 6 世紀に、本土におけるツロの主要な地区を滅ぼしました。しかし、島にあるツロは非常に強力に防備を固めていました。それは残って「新ツロ」として知られるようになりました。

その後、数世紀が経ちました。紀元前 332 年にアレクサンダー大王がツロの町を包囲しました。その島の要塞にたどりつくために、アレクサンダーは古いツロの残っていたものを取り壊し、その残骸によって幅 63 メートルにもおよぶ土手道を海の中へと築きました。これこそ、第 12 節の正確な成就です。「彼らはあなたの財宝を奪い、商品をかすめ、城壁をくずし、楽しい家をこわし、石と木と土とを水の中に投げ込む」（エゼキエル 26:12）。

新ツロは今日まで再建されていません。「わたしはあなたを裸の岩にする。あなたは網を張る場所となり、再び建てられることはない。主なるわたしがこれを言ったと、主なる神は言われる」（エゼキエル 26:14）。

かつてツロがあった場所では、今日、漁師が自分たちの網を乾かしています。

シドン

シドンは、戦争によって荒廃することが預言されています。「主の言葉がわたしに臨んだ、『人の子よ、あなたの顔をシドンに向け、…言え。…わたしはあなたのうちで栄えをあらわす。わたしがシドンのうちにさばきをおこない、そのうちにわたしの聖なることをあらわす時、彼らはわたしが主であることを知る。わたしは疫病をこれに送り、そのちまたに流血を送る。その四方からこれに臨むつぎによって 殺される者がその中に倒れる時、彼らはわたしが主であることを知る』（エゼキエル 28:20-23）。

シドンは、地中海沿岸のツロの町から北へ約 30 マイルのところに位置していました。それはツロの町よりも古くからありました。シドンの戦艦はペリシテ人により破壊され、シドンは灰と化しました。アッシリヤとバビロンは軍隊を派遣し、

シドンの宝を奪いました。バビロンによる支配の後、ペルシャ人が支配し、アルタクセルクセス 3 世オコスに対する反乱によって厳しい制裁を受けました。

シドンはツロのように荒廃し、破壊され、二度と再建されることはない、とは預言されていないことに注目してください。ツロはシドンよりもはるかに地理的に恵まれているため、人間の論理で言えば、シドンが破壊されても、ツロは存在し続けると考えるほうがはるかにあり得そうな話です。しかし、神聖な感化を受けた聖書が正しいのです。

エジプト

聖書の預言が成就したもう一つの例は、エジプトです。エジプトは、かつて最高の文明を有し、科学、芸術、豪華さ、壮大さ、権力ははるかに進んでいました。ナイル川の豊かで肥沃なデルタに恵まれたエジプトは、当時、世界の穀物倉でした。その偉大な王国が「もろもろの国より卑しく」と預言されたように、減少することは事実上、不可能であると思われました。しかし、エジプトは幾世紀にもわたって、古代の大きな一連の王朝によって支配され続けてきました。

「すなわちエジプトの運命をもとに返し、彼らをその生れた地であるパテロスの地に帰らせる。その所で彼らは卑しい国となる。これはもろもろの国よりも卑しくなり、再びもろもろの国民の上に出ることができない。わたしは彼らを小さくするゆえ、再びもろもろの国民を治めることはない」(エゼキエル 29:14, 15)。

「わたしはナイル川をからし、その国を悪しき者の手に売り、異邦人の手によって国とその中のものとを荒す。主なるわたしはこれを言った」(エゼキエル 30:12)。

なんと著しく、これらの預言が成就したことでしょう! その国は今でも存在しますが、外国人、つまりエジプト人ではなくアラビヤ人により支配されています。エジプトは、荒廃し、廃れた国になりました。その国の住民は貧困にあえいでいます。その国は、「卑しい国」として存続しているのです(エゼキエル 29:14)。

バビロン

聖書と歴史はバビロンという強大な都市について、何と述べているのでしょうか。

「国々の誉であり、カルデヤびとの誇である美しいバビロンは、神に滅ぼされたソドム、ゴモラのようになる。ここにはながく住む者が絶え、世々にいたるまで住みつく者がなく、

アラビヤびともそこに天幕を張らず、羊飼もそこに群れを伏させることがない(イザヤ 13:19, 20)。

2,500 年の期間にわたり、バビロンの遺跡は、聖書の預言の正確性に関する

無言の証人となっています。バビロンにおいてアラブ人が幕屋を張ることなく、砂漠の野生動物がその古代の世界都市の廃墟の中を住みかとしていることは、今なお事実です。

正しい預言者と偽預言者を見分ける方法とは、どのようなものでしょうか？

真の預言者を偽預言者からどう見分けるか

「もし預言者があって、主の名によって語っても、その言葉が成就せず、またその事が起らない時は、それは主が語られた言葉ではなく、その預言者がほしいまに語ったのである。その預言者を恐れるに及ばない」(申命記 18:22)。

預言者であることの第一の明らかな試金石は、その預言が成就するかしないかです。もし成就しないのであれば、神から出たものではありません。

「律法と証とに求めなさい。もし彼らがこの言葉によって語らないならば、それは彼らのうちに光がないからである」(イザヤ 8:20 英語訳)。

第二の試金石は、預言者のメッセージが神の律法の諸原則や聖書の他の部分と調和しているかどうかです。もし、調和していなければ、「彼らのうちに光がない」のであり、その人は偽預言者です。

第三でありながら、最も明白な試金石は、マタイ 7:20 に記載されています。「このように、あなたがたはその実によって彼らを見わけるのである」。

「神の聖なる人」は、神の真の預言者となるために選ばれた人で、彼らの生活は義なる品性という実を結びますが、偽預言者は、彼らの不義の実(嘘、貪欲さ、高慢さ、欺瞞など)を表します。

わたしたちは偽預言者に対して警戒するだけでなく、誤った預言の解釈にも警戒しなければなりません。

神の預言を与えるのは聖霊ですから、ただ聖霊の助けがあつてはじめて預言を正確に理解することはできます。聖句は、聖句と比較されなければなりません(イザヤ 28:10, 13)。そして、どのような個人の私的な解釈が許容されてはならないのです(ペテロ第二 1:20)。

かつて生存した預言者のうちで最も偉大なイエスは、最後の時代に現れる偽預言者について、わたしたちに厳粛な警告を与えておられます。「にせキリストたちや、にせ預言者たちが起つて、大いなるしるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう」(マタイ 24:24)。

今日の預言、わたしにも？

預言は、旧約の時代だけでなく、今日も神の民を導くために必要です。なぜなら、「預言がなければ民はわがままにふるまう(幻がなければ、民は滅びる)」からです(箴言 29:18)。

預言者は、将来の出来事を予告するだけでなく、当時の人々に対する警告や

教えを与えます。そのため、聖書の中に、預言者のすべてのメッセージが記録されているわけではないことがわかります。その一例は、伝道者ピリポの四人の娘です。

「この人に四人の娘があったが、いずれも処女であって、預言をしていた。幾日か滞在している間に、アガボという預言者がユダヤから下ってきた」（使徒行伝 21:9, 10）。

預言者たちによってわたしたちの現在の世代に与えられた警告は、偉大にして厳粛なものであるため、次のように訓告されています、「預言を軽んじてはならない」（テサロニケ第一 5:20）。

「こうして、預言の言葉は、わたしたちにいつそう確実なものになった。あなたがたも、夜が明け、明星がのぼって、あなたがたの心の中を照すまで、この預言の言葉を暗やみに輝くとしびとして、それに目をとめているがよい」（ペテロ第二 1:19）。

神の民を導くためにいつまでも預言が必要か？

「なぜなら、わたしたちの知るところは一部分であり、預言するところも一部分にすぎない。全きものが来る時には、部分的なものはすたれる」（コリント第一 13:9, 10）。

贖われた人々が神との完全な調和という人間の本来の状態へと回復され、神の王国において喜ぶとき、彼らは再び、神と隔たりなく交わるようになります。そのとき、預言はすたれ、わたしたちは顔と顔を合わせてこのお方を見るようになり、わたしたちの将来は神のうちにあって安全になります。

恐れるな、小さい群れよ

Fear Not, Little Flock



「世界の人口に比べれば、神の民は、常にそうであったように、ごく小さな群れであろう。しかし彼らが、みことばに示されている真理に立つならば、神は彼らの逃れ場となって下さる。彼らは全能の神の広い盾のもとに立つのである。」(患難から栄光へ下巻 296)

9 月

9月1日

ローマへの到着

「三か月たった後、わたしたちは、……舟で、出帆した。ところが、兄弟たちは、わたしたちのことを聞いて、……出迎えてくれた。パウロは彼らに会って、神に感謝し勇み立った。」(使徒行伝 28:11, 15)

パウロは重い心で、……長い間待望していた世界の首都への訪問に出立した。彼が予期していたこととは何と事情が違っていることであろう。鎖につながれ、汚名を着せられている身で福音を宣べ伝えるとは何とということであろうか。ローマで多くの魂を真理へ導きたいという彼の希望は、当てはずれに終わる運命にあるように思えた。……

かたくなな顔つきをした犯罪人と一緒に鎖につながれた白髪の老人は、多くの人の侮蔑的な流し目を受け、多くの無礼な嘲笑の的となる。彼に会う人はみなだれ一人として、彼に憐れみや同情のまなざしを向ける者はいない。彼はおとなしく鎖につながれ、静かに、ゆっくりと自分の道を進む。

突然歓喜の叫びがきこえたかと思うと、ひとりの男が通りがかりの群衆の中からとび出してきて、その囚人の首にしがみつき、あたかも息子が長い間留守をしていた父を迎えるかのように、涙と喜びをもって抱きしめる。多くの者が愛情のこもった、しかも待ちかねたようなまなざしで、この囚人こそ、自分たちにいのちのこぼを語ってくれた人だと認めるや、そのつど同じ光景が繰り返される。……

心の暖かい弟子たちが福音の父のまわりに熱心にむらがるたびに、一行は全部立ち止まってしまう。兵士たちは遅れるのでいらいらするが、この楽しい面会を邪魔しようとは思わない。彼らもこの囚人を尊敬し重んじるようになっていたからである。弟子たちは、そのやつれた、苦労の刻まれている顔に、キリストのみかたが反映されているのを見る。彼らは、パウロを忘れたこともなければ、彼を愛する心にも変わりがないということ、また、彼らの生活を生き生きしたものにし、神に対する平和を与えてくれる喜ばしい望みが持てるのは、彼のおかげであるということ、自信をもってパウロに伝える。彼らは、特別に許されさえすれば、町までの道をずっと、愛の熱情に燃えて、パウロを肩にのせて行くであろう。

パウロが兄弟たちに会って「神に感謝し勇み立った」と述べているルカの意味深長な言葉に気がつく者はほとんどいない。パウロの鎖を恥とせず、かえって同情して泣く信者の群れの真中にあって、使徒は声高らかに神を讃美した。彼の心につたれこめていた悲しみの雲は一掃された。彼は自分の働きが無駄ではなかったと感じた。キリスト者としての彼の生涯は試練と苦難と失望との連続であったが、このとき彼は豊かに報いられたと思った。(パウロの生涯からのスケッチ 272-274)

ローマにおいてユダヤ人たちに証言する

「パウロは、自分の借りた家に満二年のあいだ住んで、たずねて来る人々をみな迎え入れ、はばかりず、また妨げられることもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えつづけた。」(使徒行伝 28:30, 31)

ローマで百卒長ユリアスの責任は終わった。ここで彼は囚人たちを皇帝の侍衛の長に引き渡した。ユリアスがパウロについてよい報告をしたのと、フェストの手紙のおかげで、パウロは隊長から好意を示され、獄に放り込まれず、自分の借家に住むことを許された。やはり番兵をつけられてはいたが、パウロは自由に友人たちに会い、キリストのみわざの進展のために骨折ることができた。

その数年前にローマから追放されていたユダヤ人が戻ることは黙認されていた。そのために今は、数多くのユダヤ人がローマにいた。パウロは、彼の敵がいりこんできて、この人々の心を自分にそむかせる機会を得る前に、まずこの人々に自分と自分の働きのことを話そうと決心した。そこでローマに着いて三日後に、主だった人々を呼んで、自分が囚人としてローマにきた理由を簡単明瞭に説明した。……

パウロは自分がユダヤ人から受けた辱めや、彼らが繰り返し彼を殺そうとしたことなどは、何も言わなかった。彼は用心深く、思いやりのある言葉で語った。人をひきつけたり、同情を求めたりしているのではなく、真理を弁護し、福音の栄えを保とうとしていたのである。

聞いていた者たちは、これに答えて、パウロの不利になるような文書は公私ともに受け取っていないし、ローマにきたユダヤ人はだれも彼を罪人として訴えた者はいないと言った。そして彼らは、キリストを信じるパウロの信仰の理由を直接に聞きたいと、熱心に頼んだ。

〔パウロ〕は自分の経験を話し、簡潔に、誠実に、力強く、旧約聖書から論証を与えた。彼の言葉は少なくともある人々の心に、決してぬぐい去られない印象を与えた。(パウロの生涯からのスケッチ 274-276)

パウロの言葉は無駄にはならなかった。ある者たちはイエスを世の贖い主として完全に受け入れ、彼らの以前の兄弟たちからの反対にもかかわらず、真理の熱心な擁護者となった。(同上 278)

9月3日

クリスチャンの遺産

「わたしたちは、あなたの考えていることを、直接あなたから聞くのが、正しいことだと思っている。実は、この宗派については、いたるところで反対のあることが、わたしたちの耳にもはいつている。」(使徒行伝 28:22)

パウロの聴衆のうちのある者は、熱心に真理を受け入れたが、他の者たちは、頑固に拒んだ。聖書の証は彼らの前に知識においては彼らと同等であり、精神力においては彼らに勝り、聖霊の特別の啓示を持っている者によって提示された。彼らは彼の議論に論駁することができなかったが、その結果を受け入れようとしなかった。……

提示された議論が決定的であればあるほど、ユダヤ人たちはますます断固として反対した。……時の終わり近くに生存している神の民は、パウロのこの経験から教訓を学ぶべきである。わたしたちは真理に対する愛がない者たちが最も明白な証拠によって確信させられることを拒むからといって、失望すべきではない。わたしたちはこの時代の形式的で世を愛する教会が、過去の時代の教会よりも神のみ言葉の教えを受けやすいと都合よく思い込むわけにはいかない。……今日の真理の最も苦い反対者は、真理の擁護者だと公言している者たちの間にいるのである。

神はご自分の民をご自分の律法の保管者とされた。彼らはその踏みにじられた律法の要求を、福音の牧師たちの反対に対抗して、また学識や地位や権威のある者たちに対抗して、掲げなければならない。その要求に拘束力があるという証拠をくつがえすことはできないが、なお敵は何度も何度も闘いをいどみ、同じ議論をもって迫っては、毎回論駁され、そして再開するのであった。

パウロは聖霊によって導かれ、教えられていたのであった。しかし、それにもかかわらず、このようには教えられなかった人々は、彼が自分たちの是認なかった真理を擁護しているのを見たとき、妬みと悪意に満たされた。彼らは、パウロが自分たちより少しでも先に動くべきではないと決め込んでいた。彼らが、高尚なベレヤの人たちのように聖書をへりくだった、教えられる精神で調べたならば、彼らはパウロが宣べ伝えたように真理を学んだであろう。しかし彼らが研究したのは、ただ自分たちを支持し、彼に有罪宣告を下す何かを見出すためであった。

真理にはつねに十字架が伴っている。信じない者たちは、信じる者たちに反対し嘲笑うのである。真理の提示が反対の嵐を生み出すという事実は、真理に対して不利な証拠とはならない。預言者や使徒たちは、神に良心的に従ったために、自らの命を危険にさらした。そして、わたしたちの救い主は、「いったい、キリスト・イエスにあって信心深く生きようとする者は、みな、迫害を受ける」と宣言しておられる(テモテ第二 3:12)。これがクリスチャンの遺産である。(パウロの生涯からのスケッチ 277-279)

ただ奇跡によって助け出される

「あなたはわたしの隠れ場であって、わたしを守って悩みを免れさせ、救をもつてわたしを囲まれる。」(詩篇 32:7)

パウロはカイザルに上訴していたが、彼に公正はほとんど期待できなかった。ネロは前任者のだれよりも道徳観念が低く、品性が浅薄で、それと同時にだれよりも狂暴な残忍性をもっていた。これ以上非人道的な君主に政権をゆだねようとしてもできなかったであろう。彼の統治の第一年には、正当な帝位継承者である腹違いの弟の毒殺という汚点が残った。ネロは、悪徳と罪惡の深みから深みへと着実に墮落していき、ついには自分の母親を、次いで自分の妻を殺してしまった。彼はあますところなく非道を行い、悪徳行為に身を落とした。彼は高潔な人々の心に、嫌惡と軽べつ心を起こさせるだけであった。

この悪徳の鬼才の宮廷で行われた不正の数々は、あまりにも下劣な、また、あまりにも恐ろしいもので、到底、言葉には言い表せないほどである。彼の破廉恥な邪惡さは、無理やり罪の共犯者にさせられた多くの人々にも、いや気を起こさせ、胸を悪くさせた。彼が次にはどんな極惡非道を持ち出すかと、彼らは絶えず戦々恐々としていた。ネロのこのような犯罪にもかかわらず、臣下の忠誠はゆるぎなかった。ネロは文明世界全体の絶対的な統治者として認められていた。そればかりか、彼は神の榮譽を受ける者とされ、神としてあがめられた。

人間的な判断からすれば、パウロがこのような裁判官から有罪を宣告されることは確実だった。しかし使徒は、自分が神への忠誠と愛を維持しているかぎり、恐れるものは何もないと思った。彼の命はネロの手中にはなかった。そしてもし彼の働きがまだなし終えられていないとすれば、ローマの皇帝も彼を滅ぼす力はないのであった。これまでパウロを保護してくださった方は、今もなお、ユダヤ人の惡意と皇帝の權力から彼を守ることがおできになった。

実際、神は、ご自分のしもべを守られた。パウロの審問にあたって、彼に対する告訴は支持されなかった。そして一般の予期に反して、ネロは自分の性格とは全くかけ離れた正義を尊重し、囚人に無罪を宣告した。パウロの足かせははずされ、彼は再び自由の身となった。(パウロの生涯からのスケッチ 301, 302)

この最後の尊い自由の休止期間は、諸教会の間で労するために熱心に活用された。(同上 304)

9月5日

救いを得させる神の力

「わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である。神の義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり信仰に至らせる。これは、『信仰による義人は生きる』と書いてあるとおりである。」(ローマ 1:16, 17)

宗教は、慣習や儀式、信条や理論のうちにあるのではない。もしそうだとしたら、生まれながらの人は、この世のことを理解するように、研究によってそれを理解できるはずである。宗教とは実際的な救いの力であり、完全に神から来る原則であり、魂に働きかける神の再生力を個人的に経験することである。(パウロの生涯からのスケッチ 276)

キリストの義は信仰から信仰へと表される。すなわち、あなたの現在の信仰から、さらに理解の増した愛によって働き魂を清める信仰へと表されるのである。信仰のために試練を忍ぶ者、困っている者たちを助けるために犠牲を払う者たちは、神の愛の臨在が魂のうちにあるのでそうするのである。男女が無私の働きを実行するために余すことなく自らを捧げるとすれば、それは心のうちにキリストの恵みがあり、生活をこのお方の模範に従って形づくっているからである。……

キリストがご自分の恵みの祝福をだれかにお与えになるとき、このお方はそれを受けた人々が自分たちの能力と力を神の奉仕にささげようと特別な義務の下に置かれる。彼らは自ら主人の働きに関わり、そのすべての行動において自分たちが改心していることを表すようにと召されるのである。キリストのご品性に対する彼らの尊敬と忠誠のうちに、彼らは自分自身のうちにその品性を再生し、そうすることによってみ父の特性を立証するのである。……

キリストのご生涯の完全な模範があるということ、大いに感謝する理由がある。このお方がされたように、わたしたちも主のみ言葉に日々従うべきである。感謝の精神を培おう。永遠のための働きを確実にしよう。わたしたちの生涯のうちに表されるキリストのご生涯のへりくだりと慈悲は、わたしたちが世に与える証であり、わたしたちがこのお方の弟子であることを告げる。従順と自己犠牲の生活を通して、わたしたちは墮落した人への神の愛をあらわすべきである。

神の命で量られる命を得たい者たちは、この生涯において働き人とならなければならない。彼らは努めて祈らなければならない。彼らはくじけてもならないし、落胆してもならない。信仰によって彼らは自分たちの救いの達成に努めなければならない。信仰と神のみ旨への完全な服従によって、彼らは神の愛にあずかり、このお方のみ旨を行う者とならなければならない。(レビュ・アッド・ハラルド 1908年9月17日)

人の称賛ではなく、神の称賛を求めなさい

「かえって、隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、また、文字によらず霊による心の割礼こそ割礼であって、そのほまれは人からではなく、神から来るのである。」(ローマ 2:29)

〔ユダヤ人たちは〕儀式の数と多さによって彼らの聖潔を量っていたが、その一方でその心は高慢と虚偽に満たされていた。彼らが地上の唯一の義なる国民であると公言している一方で、彼らの不義のために神ののろいが彼らの上にあった。

彼らはモーセによって自分たちに与えられた律法について、清められていない混乱した解釈を受けてきた。彼らは伝統につぐ伝統を加えてきた。彼らは思想と行動の自由を制限し、無意味な儀式や礼典をえんえんと繰り返しているうちに、ついに神の戒めと儀式と奉仕を見失ってしまった。……

イエスは人類と全く思いを一つにすることによって、改革の働きを始められた。このお方はユダヤ人であつた。そして、このお方は隠れたユダヤ人の完全な模範を残そうとしておられた。このお方は神の律法に最高の尊敬を示し、その教訓への従順を教えられたが、その一方でパリサイ人のうわべばかりの敬虔さを責め、人々をしぼりつけている無意味な規則から解放しようとなさった。(世界総会広報 1908 年 9 月 17 日)

神の真理はかつて一度も世に人気があつたことはなかった。生まれつきの心はつねに真理に反対する。……わたしたちはカルバリーの人に従う者となるためには、世への愛着、心の誇り、また偶像化する傾向のあるすべてのものを捨てなければならない。真理に従う者たちは世から愛され誉れを与えられることは決してない。このお方が人性のうちに人の子らの間を歩まれたとき、神なる教師の唇からはこの言葉が聞かれた。だれでもわたしの弟子となろうとする者は、十字架を負い、わたしに従ってきなさい、と。しかり、わたしたちの模範であられるお方に従いなさい。このお方は人の称賛と誉れを求めていただろうか。ああ、そうではなかった。それなのにわたしたちはこの世の者から誉れや称賛を求めるのだろうか。

神への愛がない者たちは、神の子供たちを愛さない。天来の教えの言葉を聞きなさい、「人が皆あなたがたをほめるときは、あなたがたはわがわいだ」(ルカ 6:26)。(教会への証 2 巻 491)

〔しかし〕ああ、贖い主の唇から語られる称賛の一言は、魂にとってなんと尊いことだろう。わたしたちは今すべてを理解することはできないが、わたしたちが満足して余りあるときが来るのであり、わたしたちが見られているように見、試練が働いてわたしたちのためにあふれるばかりの永遠の重い栄光を得させることを悟るときが来るのである。(彼を知るために 277)

9月7日

従順のための力

「すると、信仰のゆえに、わたしたちは律法を無効にするのであるか。断じてそうではない。かえって、それによって律法を確立するのである。」(ローマ 3:31)

福音は恵みの良き知らせ、すなわち恩恵の知らせであり、それによって人は罪の宣告から解放され、律法に受け入れられる服従を捧げることができるようになるのである。福音は道德律を生活の基準として指し示す。その律法は、二心のない服従を要求することによって、罪人につねに許しと平安を与える福音を指し示すのである。……

キリストは人々が、自分たちが神の戒めを破るだけではなくて、他の者たちにそれらを破るようにと教えることを予見された。ある者たちは模範によってこうすることに飽き足らず、罪を擁護し、違反者を正当化するために神のみ言葉を曲解するのである。そのような人々は、神の民と何の関わりもない。しかし最大の罪は自称見張り人たちの上にある。彼らはためらうことなく律法の悪口を言い、さらには聖書について無知な者たちに、もし彼らがそれを守るならば恵みからもれるのだと信じさせるのである。「わたしたちがしなければならぬことはただ、キリストを信じ、キリストのもとに来ることである」と彼らは言う。

わたしたちは罪人に、罪を取り除くことができるお方としてイエスを指し示す一方で、彼に何が罪であるかを説明し、そして彼がその罪から救われることはできるが、罪のうちに救われることはできないことを示さなければならない。彼は「罪は不法である」(ヨハネ第一 3:4) ということを経悟せられなければならない。パウロはキリストの死後何年もたってから次のように問うた、「律法は罪なのか。断じてそうではない。しかし、……わたしは……もし律法が『むさぼるな』と言わなかったら、わたしはむさぼりなるものを知らなかったであろう」(ローマ 7:7)。このようにしてパウロは道德律を高めている。この律法が実際に日常生活において実践されるならば、それは確かに神の知恵であることが分かるのである。それは罪を検出する役割を果たす。それは道德的品性のうちに欠陥を発見し、罪が非常に罪深いことを示し、すべての隠れたことを明らかにするのである。その要求への服従を通して、クリスチャンの品性が完成されるのである。

神の律法はこのお方の思いとみ旨の写しである。そこで禁じられている罪が天で見出されることは決してありえない。神は愛に促されて十誡の十の戒めの中にご自分のみ旨を表されたのであった。その後このお方はご自分の聖なる律法を説明し描写するために預言者と教師を送ることによって、人に対するご自分の愛を示された。

神はご自分の律法の中に、完全な生活の基準を人にお与えになった。従うならば、人はキリストの功績を通してそれによって生きるのである。犯すならば、それは罪に定める力を持っている。律法は人をキリストの許に送り、そしてキリストは彼らにその律法に戻るように指し示される。(パイブルコー 1894 年 4 月 16 日)

得られた経験

「このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている。わたしたちは、さらに彼により、いま立っているこの恵みに信仰によって導き入れられ、そして、神の栄光にあずかる希望をもって喜んでいる。それだけではなく、患難をも喜んでいる。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているからである。そして、希望は失望に終ることはない。なぜなら、わたしたちに賜わっている聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからである。」(ローマ 5:1-5)

真の働き人たち、すなわち神との共労者たちは、働きの神聖さと、成功してそれを前進させるために会わなければならない激しい争いを自覚している。それがいかに困難であろうとも、彼らは働きのことを考えて弱ったり落胆したりすることはない。……わたしたちに何一つ欠けることがないようにと、わたしたちのためになされた十分な供給を自分のものとしなければ、わたしたちには何の言い訳の余地もないのである。骨折りにしり込みし、試練の下で苦しんでいるときに不平を言うことは、神の僕を責任と重荷を負うのに弱くて役に立たない者にする。

.....

戦いの最前線にあつて断固として立つすべての人々は、自分たちに対するサタンの特別な戦いを感じなければならない。彼らがサタンの攻撃に気がつくとき、彼らは要塞に逃げるのである。なぜなら彼らは神からの特別な力の必要を感じるからである。彼らはこのお方の力のうちに働くので、彼らの得たすべての勝利は彼らを高めることをしないばかりか、彼らを信仰のうちに力強いお方にもっとしっかりとより頼むようにさせる。彼らの心のうちに神への深く熱烈な感謝が呼び起こされ、彼らが敵に迫られたときに経験した、苦難においての喜びが呼び起こされるのである。これらの自発的な僕たちはある一つの経験を得ていく。神のみ事業へ誉れを帰す品性が形づくられていくのである。

今は神の僕にとって厳粛な特権と聖なる信任の時である。もしこれらの信任が忠実に守られるなら、「あなたの会計報告を出しなさい」と主人が仰せになる時(ルカ 16:2)、忠実な僕の報いは大いなるものとなるのである。イエスがわたしはもうあなたがたを僕とは呼ばず、友また客と呼ぶと言われる時、耐えた熱心な骨折り、忍耐の無私の働き、根気強い努力は、豊かに報いられる。主人の承認は、なした働きの大きさや、多くのものを得たことによるのではなく、少ない事柄においてさえ忠実であったことによる。報いが与えられるのは大いなる結果のゆえではなく、神にとって重要なのは動機である。善と忠実さを神は達成された働きの偉大さより尊重されるのである。(ビュー・アソド・ペラド 1886 年 8 月 17 日)

9月9日

あなたはだれに仕えているか

「もしわたしたちが、彼に結びついてその死の様にひとしくなるなら、さらに、彼の復活の様にひとしくなるであろう。わたしたちは、この事を知っている。わたしたちの内の古き人はキリストと共に十字架につけられた。それは、この罪のからだが減び、わたしたちがもはや、罪の奴隷となることがないためである。」(ローマ 6:5, 6)

真の自由と独立は、神の奉仕のうちに見出される。このお方の奉仕が、あなたの幸福を増進しないような制限をあなたに加えることはない。このお方のご要求に従うことによって、あなたは向こうみずなわがままと罪の道においては決して持つことができない平安と満足と喜びを見出すのである。であるから、あなたが望む自由の性質についてよく学びなさい。それは神の子たちの自由、すなわちキリスト・イエスにおける自由であろうか。それともあなたは下劣な激情を利己的にほしきままにすることを自由と呼ぶのだろうか。そのような自由には最も重たい自責の念がついてくるのである。それは最も残酷な束縛である。

思いの真の独立は頑固さではない。それは青年たちを導き、他人の言動が何であろうと関係なく、神のみ言葉に基づいて自分たちの意見を形成させるのである。(ビュー・アンド・ワールド 1884 年 8 月 26 日)

きよい原則を心にたくわえねばならない。魂という板に、真理を彫りこまねばならない。み言葉のとうとい真理を記憶に満たさねばならない。そのときこれらの真理は、美しい宝石のように、日ごとの生活に光を放つのである。

神がそのみ手のわざによってお造りになったものの上におかれる価値、すなわち、神がご自分の子らに寄せられる愛は、人類を贖うために神がお与えになった賜物の中にあらわされている。アダムは、サタンの支配下に陥った。アダムは罪と罪による死を世にもたらした。神は人類を救うために、ひとり子をお与えになった。神はこれによって自ら義であられながら、さらにキリストを受け入れるすべての者を義となさることがおできになる。人は自分自身をサタンに売り渡したが、イエスは人類を買い戻され、男女を残酷な压制者の奴隷状態から贖いだされた。

天の無限の値をもって、わたしたちは第二の猶予期間を与えられた。それなら、神がわたしたちのすべての思いの中に、おられるべきではないだろうか。このお方のみ旨がわたしたちの行動を支配すべきではないだろうか。

わたしたちは、自分自身のものではない。イエスはご自分の血でわたしたちを買い取られたのである。自分のタラントを地中に埋めてしまってはならない。それを神のために用いなければならない。どんな事業に従事しようと、イエスと一緒になければならない。もし救い主に対する愛が冷えていくことに気がついたら、自分の事業を放棄して、「主よ、わたしはここにおります。わたしに、何をさせようと望んでおられるのでしょうか」と、言わなければならない。イエスは、わたしたちをやさしく受け入れ、存分に愛してください。このお方は、だれひとりとして滅びることをお喜びにならず、恵み深く忍耐深いお方であるからわたしたちを寛大に許してください。このお方は愛なる贖い主であられる。(パイブルコー 1900 年 10 月 15 日)

へびに抵抗するための力

「あなたがたは知らないのか。あなたがた自身が、だれかの僕になって服従するなら、あなたがたは自分の服従するその者の僕であって、死に至る罪の僕ともなり、あるいは、義にいたる従順の僕ともなるのである。しかし、神は感謝すべきかな。あなたがたは罪の僕であったが、伝えられた教の基準に心から服従して、罪から解放され、義の僕となった。」（ローマ 6:16-18）

人が罪を犯したとき、彼の性質は邪悪になり、彼はサタンと敵対するのではなく、調和するようになった。……しかしサタンが、女のすえがへびの頭を砕くことを聞いたとき、彼は人間の性質を堕落させ、またその性質を自分の性質に同化させることに成功したものの、ある神秘的な工程によって神が人にその失った力を回復なさり、そして人が自分の征服者に抵抗し勝利できるようになることを知った。

人間のうちに、サタンに対する敵意を起こさせるのは、キリストが心の中に植えつけられる恵みである。この恵みがなければ、人間は引き続きサタンの捕虜であり、つねに彼の命令に従うしもべであるしかない。しかし、心の中の新しい原則が、これまで平和であったところに争闘を起こすのである。人間はキリストがお与えになる力によって、暴君であり横領者であるサタンに立ち向かう力を得る。だれでも罪を愛する代わりに罪を憎み、これまで心の中を支配していた欲望に抵抗して、それに打ち勝つならば、それはまったく上からの原則が働いていることを示している。聖霊は絶えず人に与えられなければならない。そうでなければ彼には闇の権力に対して戦う気質はまったくないのである。……

サタンの支配下にいる者は、自ら悪の支配に屈服する。しかしその人がキリストの恵みを受けいれると、罪の嫌悪感を催す性質を認めるようになり、上からの力によってへびに抵抗するようになる。……

神からわたしたちの愛情をそらし、このお方へのわたしたちの確信を壊すことはどんなことでも、それによって偶像になるのである。神は心全体をお求めになる。何も残しておいてはならない。わたしたちの救い主は仰せになった、「わたしの味方でない者は、わたしに反対するものであ……る」（ルカ 11:23）。わたしたちはキリストと真理との敵に妥協するために、神のみ言葉の一つの命令でさえも無視するなら、安全ではいられない。……

〔キリストは〕つねにご自分の民にすべての神聖でない感化から離れるようにとお求めになる。ご自分の無限の愛のうちに、このお方は彼らが罪の軍隊に対する戦いを維持することができるようにと、このお方の恵みという測り知ることができない富を提供された。その恵みを通して、彼らはすべての戒めに服従を捧げ、そしてすべての約束の成就を受けることができるのである。（レビュー・アンド・ヘラルド 1882年7月18日）

9月11日

霊によって歩く

「こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない。なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の法則は、罪と死との法則からあなたを解放したからである。律法が肉により無力になっているためになし得なかった事を、神はなし遂げて下さった。すなわち、御子を、罪の肉の様で罪のためにつかわし、肉において罪を罰せられたのである。これは律法の要求が、肉によらず霊によって歩くわたしたちにおいて、満たされるためである。」(ローマ 8:1-4)

律法の初めの四つの戒めは、わたしたちの神への関係から生じるのであり、わたしたちの全心の愛情のこもった忠誠を要求している。後の六つはわたしたちの同胞への関係から生じるのであり、同胞の関心をわたしたちの関心とみなすことを要求している。これらの戒めを守ることは人のすべての義務を包含しており、永遠の命の条件を提示している。さて問題は、人がこのご要求に従うかということである。人は神を最高に、また自分の隣人を自分のように愛するであろうか。人が自分自身の力でこれを行うことを可能とする方法はない。キリストの神性の力が人性の努力に加えられなければならない。(サイズ・オブ・ザ・タイムズ 1887年11月27日)

サタンはアダムの息子や娘が律法を守るとは不可能だと宣言し、それにより神には知恵と愛がないと責めたのであった。もし彼らが律法を守ることができないとすれば、律法制定者に誤りがあることになる。サタンの支配下にいる人々は神に対するこれらの告発を繰り返し、人は神の律法を守ることができないと主張する。ご自分が人類家族の頭また代表者として立ち、教訓と模範の両方によって肉において罪を責め、サタンの告発が偽りであることを証明するために、イエスはご自分を低くされ、ご自分の神性を人性で覆われた。このお方は人の性質があじわう最も激しい試みを受けられたが、罪は犯されなかった。なぜなら罪は不法だからである。信仰によってこのお方は神性をつかまれた。それはちょうど人性がこのお方を通して無限の力をつかむことができるのと同様である。(同上 1896年1月16日)

キリストが人性のうちにあって律法に生きられたように、わたしたちも力を求めて強いお方によりすがるときに、それができるのである。しかし自分の義務についての責任を他人におしつけて、彼らがわたしたちにすべきことを告げてくれるのを待っていてはならない。……神を喜ばせないようなことは何もしない決心する者は、自分の問題を神の前に持ち出したあとで、とるべき道を知るであろう。そして彼らは、知恵ばかりでなくまた力を受けるのである。服従と奉仕の力は、キリストが約束されたように彼らにさずけられる。(レビュー・アンド・ヘラルド 1910年7月14日)

清い心、幸福な心

「なぜなら、肉に従う者は肉のことを思い、霊に従う者は霊のことを思うからである。肉の思いは死であるが、霊の思いは、いのちと平安とである。」(ローマ 8:5, 6)

だれ一人として、神の律法の違反のうちに生きながら、このお方が要求されているように自分たちの体をもって神に栄光を帰すことはできない。もし体が第七条の戒めを破るとすれば、それは思いの指図による。もし思いが清くないならば、体も自然に清くない行動をとるのである。純潔は、自分の体を清くない行動に明け渡してしまう魂のうちには存在することができない。もし体が欲望に仕えているならば、思いは神への献身を保つことはできない。清められた思いを保つためには、体が聖化と誉れのうちに保たなければならない。思いはそうして神の律法に仕え、そのすべての要求に心からの服従を捧げるのである。そうすることによって、そのような者は使徒と共に、自分の肢体を義の器として神に屈服させることができる。「だから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従わせることをせず」(ローマ 6:12)。使徒がキリストに従う者たちの特権として描写している自由は、神の律法を足の下に踏みじめることを喜ぶ者たちによつては経験されることは決してないのである。……

主は人を高潔な者として造られた。しかし人に及ぶ神の律法の聖なる要求に服従を捧げることを拒んだために、彼は墮落し、退化した。人のすべての熱情は、もし適切に支配され正しく導かれれば、彼の肉体的また道徳的健康に貢献し、彼に多くの幸福を保証するのである。姦淫する者、不品行な者、みだらな者は、命を楽しまない。神の律法を犯す者にとって、真の喜びはありえない。主はこれをご存知であつたので、人を抑制されたのである。このお方は指示し、命令し、明白に禁じられる。

しかし、多くの者たちはこれまで悪魔に欺かれてきているため、人間の幸福のための道と方法を提供することにおいて、自分たちが偉大な神に勝ると考えるのである。彼らは自分たちの不幸を、十戒の律法に含まれている禁止のせいにする。そしてもし彼らが、多少なりとも神の律法のご要求から解放されたと感じることができれば、彼らは実に自由に幸福になるのである。

男女が神の律法のご要求を認め、彼らの足をこの永遠の真理の土台に据えるとき、彼らは主が道徳的な力をお与えになることのできる立場にたつのである。その力によって彼らはその光を人々の前に輝かせ、人々は彼らの良い行いを見て、天におられるわたしたちの父をあがめるようになるのである。(レ・ビュー・ア・ド・ハレル 1870年7月14日)

造りかえられる

「兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である。あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである。」(ローマ 12:1, 2)

キリストはすべてを要求なさる。もしこのお方の要求がそれ以下だとすれば、わたしたちをその程度の水準まで至らせるには、このお方の犠牲はあまりに高価で、大きすぎる。わたしたちの聖なる信仰は、分離せよ、と叫ぶ。わたしたちはこの世、あるいは死んだ熱意のない公言者と妥協すべきではない。「心を新たにすることによって、造りかえられ」(ローマ 12:2)。これが自己否定の道である。そしてあなたがその道は狭すぎて、この細い道には自己否定が多すぎると考えるとき、またあなたがすべてのものをあきらめるのはなんと困難なことであろうと言うとき、次のことを自問してみなさい。キリストはわたしのために何を捨ててくださったであろうか、と。この問いの前にはわたしたちが自己否定と呼ぶようなものは何でもその影をひそめてしまうのである。園において大きな血の滴りの汗をかいでおられるこのお方を見なさい。一人の天使が神の御子を力づけるために天から送られた。怒った群衆によって罵られ、嘲られ、侮辱されながら、法廷への道のりをこのお方について行きなさい。古い紫の王衣を着せられたこのお方を見なさい。荒々しい冗談と残酷な嘲笑を聞きなさい。彼らが高潔な額にいばらの冠をおき、葦でこのお方を打ち、それによってとげがこのお方のこめかみを貫いてその聖なる額から血が流れるのを見なさい。残忍な群衆が熱心に神の御子の血を叫び求めているのを聴きなさい。このお方は彼らの手に渡される。そして彼らは、青ざめ、弱くなり、失神しておられる高貴な苦難者を十字架へと連れて行く。このお方は木の十字架上に手足を広げられ、釘がこのお方の柔かい手足を突き通す。十字架にかかっているお方を見なさい。天使が自分たちの顔を恐ろしい場面から覆い、太陽がその光を隠し、見ることを拒むほどの苦悶の恐ろしい時間を。これらのことを考え、そして道が狭すぎるかと問いなさい。否、決して狭くはないのである。

二心の中途半端な生活の中では、疑いと暗闇を見いだすようになる。あなたは宗教の慰めを喜ぶことも、世が与える平安を喜ぶこともできない。サタンの怠惰という心地良い椅子に座ることをせずに、立ち上がって、高められた標準を目ざしなさい。その標準に到達することはあなたの特権なのである。キリストのためにすべてを捨てることは、祝福された特権である。他の者たちの生活を見、彼らを真似て、それ以上少しも高く上がらないようなことをしてはならない。あなたには一つの真の誤りのない模範がある。ただイエスにのみ従うことが安全である。……天のために品性を形成しなさい。(教会への証 1 巻 240, 241)

互いに尊敬する

「兄弟の愛をもって互にいつくしみ、進んで互に尊敬し合いなさい。」(ローマ 12:10)

わたしたちのための救い主のご目的を成就しないかぎり、わたしたちは神のみ前において罪の宣告の下に立つことになる。このお方を堅くつかみ、わたしたちの宗教経験を通してこのお方に無私の愛の温かい流れを送っていただくことによって成就するのである。わたしたちがこうするとき、わたしたちの霊的な力は、自分たちが命の与え主との近いつながりのうちに生きていることを示す。

徹底的なクリスチャンは、自分の主人への深い心からの愛が、その行動の動機の源泉となる。キリストへの彼の愛情という根を通して、信仰とまた自分の周りにいる者たちへの無私の関心がおこる。一番になりたいという利己的な願いは消滅する。彼の思いのうちには何の憎しみもない。なぜなら彼の心には何の憎しみもないからである。彼は愛によって働き、魂を清める信仰を持っている。救い主の生命の精錬する感化が、彼の霊的生命を活気づけ、元気づけるのである。彼の兄弟への忠誠によって、彼は魂の価値を悟っていることを示すのである。彼は霊と、また理解をもって祈ることができる。彼の熱心さ、またその原則に対する忠実な厳守、そしてすべて真実なことや尊ぶべきこと、正しいこと、純真なこと、また称賛に値するものに対するその献身によって、彼は同情できる者となり、また彼が交わる者たちにとって助けとなるのである。(ビュー・アンド・ハルド 1903年6月9日)

教会員は、共に調和して歩むことを契約すべきである。各自は自分の心に門守をおき、自分の兄弟の悪について考えることを許さず、彼らの持っているすべての良い特質を称賛すべきである。わたしたちは神のみ言葉の尊い約束と教えを思いに蓄えるべきである。サタンが何の益にもならない事柄へ注意をそらそうとするとき、わたしたちは天来の約束について考え、また語るべきである。そうすれば、誘惑者は克服されるのである。このように真剣な祈りと断固とした信仰をもって日毎に戦うことによって、すべての者は勝利を得ることができる。克服すべきことが最も多い者たちは、キリストが最も多く許してくださり、最も多く愛した罪人になる。そして彼らはついに王座に最も近く立つのである。

キリストは助けの必要を感じるすべての者たちを、喜んで助けられる。しかしもしだれでも自分自身に満足しているならば、救い主は彼らのそばを通り過ごされる。フラベルは次のように述べた。「主が魂を満たそうとされるとき、このお方はまず魂を空にされる。このお方が魂を豊かにしようとき、このお方はまず魂を貧しくされる。このお方が魂を高めようとき、このお方はまず魂をその惨めさや欠乏や無価値さを感じさせるのである」。(ヒストリカル・スケッチ・オブ・SDA・ミッション 214)

過ちに対処する

「愛する者たちよ。自分で復讐をしないで、むしろ、神の怒りに任せなさい。なぜなら、『主が言われる。復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する』と書いてあるからである。むしろ、『もしあなたの敵が飢えるなら、彼に食わせ、かわくなら、彼に飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃えさかる炭火を積むことになるのである』。悪に負けてはいけない。かえって、善をもって悪に勝ちなさい。」(ローマ 12:19-21)

キリストは人の魂のために無限の値を払われた。だから、わたしたちは彼らをキリストが買い取られたこのお方の所有として扱うべきである。……弟子たち「このお方が」教えられた祈りの中で、このお方は次のように言われた、「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をおもゆるしてください」(マタイ 6:12)。これによってこのお方がわたしたちに理解させたいとお思いになったのは、わたしたちが許されるためにわたしたちに負債のある者たちから当然受けるべきものを要求すべきではないということではなかった。そうではなく、もし思慮のない管理によって彼らが払えないことになったとき、彼らは厳しく扱われたり、圧迫されたり、刑務所に入れられたりすべきではないということである。

盗みや詐欺行為を罰しないよう支持することには何の徳もない。しかし教会に関連する問題で、教会内にとどめておくべきものがある。個人的報復は神の子には似合わない。もし彼が虐待されたら、彼は耐え忍ぶべきである。もし当然受けるべきものをだましとられたとしても、彼は裁判所にて不信者に訴えるべきではない。それよりはむしろ、損失と不正に耐えなさい。不正な扱いを受けた者は傷つけられたと感じ、また自分の同胞を抑圧しようと誘惑されるかもしれないが、もし彼がこうした方法に従うなら、彼は自分にキリストの霊がないことを表しているのである。

クリスチャンは自分たちの権利のために争う必要はない。彼らはキリストの旗の保護のもとに立つ。彼らは王の王、主の主の最高の権威を認めるべきである。彼らとその兄弟間の問題に関しては、彼らはカイザルやピラトに訴えるべきではない。これらのすべての問題の明細書が記録されている。そして、このお方が良いと思われる時に、キリストがご自分の選民のあだを打たれるのである。神は自分の兄弟と神のみ事業からだましとる者を対処される、「主が言われる。復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する」と仰せになる(ローマ 12:19)。(レビュー・アンド・ヘラルド 1899年1月3日)

許しの精神をいだくべきである。しかし主は言われる、「もしあなたの兄弟が罪を犯すなら、彼をいさめなさい」(ルカ 17:3)。侵害はわたしたちに対してかも知れないし、キリストがご自分の血によって買い取られた他の魂に対してかも知れない。これらの誤りは見過ごされるべきではない。主はわたしたちの兄弟に対して不当な取り扱いを許すべきではないと命じられた。正しいのは、不正行為に対して憤りを感じるのみである。なぜならそれによってキリストの名誉が汚されているからである。罪はそのしかるべき名で呼ばれるべきであり、悪事を働く者の前にはっきりと明確に述べられるべきである。(同上 1899年1月3日)

自己否定の宣教の働き

「あなたがたは、主イエス・キリストを着なさい。肉の欲を満たすことに心を向けてはならない。」(ローマ 13:14)

いくつかの語学を理解するゲイメット兄弟は、真剣さと大いなる自己犠牲をもって宣教の働きに携わっていた。わたしたちは山を登るために馬車に乗り、聞く者たちへ真理を伝えるために彼が旅をした道を登って行った。道が狭くなり、恐ろしい絶壁がわたしたちの下で口を開いていたので、やむをえず馬車を残した。どんどん登って彼はついに馬屋にたどり着いた。そして、そこに農夫たちが聖書を学ぶために集まった。人々が彼に会うことのできる唯一の時間が夜だったので、彼はこの危険な道を夜間に行き来しなければならなかった。冬には、これらのイタリヤの貧しい農夫たちは自分たちのぬくもりのために家畜の熱を利用するために馬屋に住んだ。わたしたちの宣教師たちはそこにおいて少しの牛乳とパンを得ることができ、それを心から喜んで食べた。このようにピエモンテ・バリーにおける人々に真理が伝えられたのであった。

夜の 10 時、11 時に働き人はこれらの山の中を抜けて恐ろしい道を登り、7 マイルもの距離を絶壁と峡谷のかたわらの道を通らなければならないのであった。わたしたちは、「どうやってこれらの危険な場所をなんとか安全に行くことができるのですか」と尋ねた。彼らは「絶壁の近くに來たら、わたしたちは両手両膝について這うのです」と答えた。わたしたちは一人の兄弟に神のみ事業において一年働くためにいくらもうかを尋ねた。「100 ドルです」と答えて、彼は言った、「ご存知の通り、山を越えて旅するのに靴や服がだめになります。またわたしたちは家族を支えなくてはならないのです」。わたしたちのうちどれほどの人が 5, 6 人の家族を連れて、み事業のためにそのようなわずかな給料で喜んで生活するだろうか。

この国において貧しい者たちがいかに生きていかななくてはならないかを見たとき、わたしの心は痛んだ。わたしたちは、子供たちが主要な食事として噴水の車で湿らせた一切れの乾燥したパンをやっと食しているのを見るのであった。しかし彼らは幸福で、自分たちは不平を言うことは何もないと考えた。なぜわたしたちは、パイやケーキや濃厚なブディングを食べなければならないと考えるのだろうか。これらはわたしたちが神に聖化されることを妨げるだけのものなのである。わたしたちは自分たちの資金内にわたしたちの出費を取めるように努めるべきである。……〔ある者たちは〕最高のホテルに行かなければならないと考える。しかしこれがなすべき方法だろうか。わたしたちの周りにあるあらゆる惨めさと苦悩を前にして、どうしてわたしたちは自分たちを満足させることができるだろうか。……神の目がわたしたちの上にあるということを信じることが、わたしたちにとって最高ではないだろうか。(ビュー・アンド・ヘアルド 1889 年 3 月 12 日)

9月17日

キリストの喜びにあずかる

「わたしたち強い者は、強くない者たちの弱さになうべきであって、自分だけを喜ばせることをしてはならない。わたしたちひとりびとりは、隣り人の徳を高めるために、その益を図って彼らを喜ばすべきである。」(ローマ 15:1, 2)

キリストがわたしたちのためになされたこと、罪人のために苦しまれたことを考えると、わたしたちは魂のための純潔で無私の愛から、彼らの益のためにわたしたち自身の楽しみと便利さを犠牲にすることによって、このお方を模倣すべきである。キリストのみ前におかれた喜び、すなわちそのすべての苦しみの中でこのお方を支えた喜びとは、哀れな罪人の救済であった。これがわたしたちの喜びとなり、またわたしたちの主人のみ事業におけるわたしたちの大望を鼓舞すべきである。……このお方がまずわたしたちを愛され、わたしたちにご自分の愛する御子を与えずにはおかなくて、かえってご自分のふところからこのお方を死に渡され、わたしたちが命を持つことができるようにしてくださった。愛、わたしたちの同胞への真の愛は、神への愛を立証する。わたしたちは高らかに公言をするかもしれないが、この愛がなければ無に等しい。わたしたちの信仰はわたしたちの体が焼かれるところまで導くかもしれないが、イエスのみ旨に生き、このお方のご生涯のうちに実証された自己犠牲的な愛がなければ、わたしたちはやかましい鐘や騒がしい鐺鉢と同じである。(教会への証 2 巻 115, 116)

〔神〕はわたしたちが何の目的のために生きているかをご存知である。そして、わたしたちの生活が貧しい人々や墮落した人類のために最大限の責任を感じているのか、もしくはわたしたちの目がさえぎられ、自分自身の利益やあわれな自分自身以外は、何もあるいはだれも見えていないのかをご存知である。……このお方は、愛、同情、愛情、また励ましを必要としている貧しい者として、家のない孤児として、苦しんでいるやもめとして立っておられる。あなたがこれらの一人にすることは、キリストにするのである。……

良いことをする特権があるあいだに、一つ一つの特権をすべていかしなさい。これらの活用された特権は、通り雨のようにあなたに水を注ぎ、生き返らせるのである。すべての機会をつかみなさい。……

クリスチャンという言葉が何を意味しているかということについて、真の自覚を持っている人は少ない。それはキリストのようになることであり、他の者たちに善をなすことであり、またすべての利己心を脱ぎ捨て、わたしたちの生活が無私の慈善の行為によって特徴づけられるようになることである。わたしたちの贖い主は、魂を教会におゆだねになる。それは彼らが無私の心で世話し、天のために訓練し、こうしてこのお方の共労者となるためである。しかし教会はあまりにもしばしば彼らを悪魔の戦場へと押しやってしまう。「それはわたしの義務ではない」と教会員の一人が言う。そして取るに足らない言い訳を持ち出すのである。他の者も「それはわたしの義務でもない」と言う。結局それはだれの義務でもなく、魂が世話をされずに滅びるままに放っておかれるのである。この自己否定と自己犠牲の事業に携わるのは、すべてのクリスチャンの義務である。(同上 329-331)

神だけに謙遜に信頼する

「十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救にあずかるわたしたちには、神の力である。……それなのに神は、知者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選び、有力な者を無力な者にするために、この世で身分の低い者や軽んじられている者、すなわち、無きに等しい者を、あえて選ばれたのである。それは、どんな人間でも、神のみまに誇ることがないためである。」(コリント第一 1:18, 27-29)

キリストが信心の奥義であり、神はご自分に謙遜に信頼することを求められ、このお方の神性の助けはすべての者に約束されている。コリントの教会はキリストの畏れを万事における最初と最後と最上のものとはしなかった。彼らはユダヤ人と学問のある異邦人の感情を損ねることを恐れて、弱くなっていた。パウロは彼らの信仰が人の知恵によらないで、神の力によるものとなるために彼が人の知恵という魅力的な言葉をもってではなく、霊と力の現れのうちに彼らのところに来たことを彼らに宣言した。(レ・ユー・アンド・ワールド 1899 年 7 月 18 日)

あらゆる意見の誇りやすべてのこの世の知恵への依存は無益であり、無価値である。……学問における誇りや科学的知識への依存といったものはどんなものでも、あなたが自分の魂と聖書のみ言葉のあいだにそれらをおくとき、柔和でへりくだったイエスの素晴らしい謙遜な宗教に対して最も効果的にあなたの心を閉ざすのである。(同上 1911 年 8 月 3 日)

謙遜という尊い恵みは、悲しいことに奉仕と教会において欠けている。真理を説教する者たちは、自分たちの能力について高く評価しすぎている。真の謙遜はキリストと真理を高めるように導き、自分たちが真理の神に全く依存していることを悟るように導くのである。謙遜の教訓を学ぶことは苦しいことであるが、最終的にこれほど益になるものは他にない。謙遜の教訓を学ぶことに伴う痛みは、自分自身に対する誤った評価によって得意になり、そのために自分たちの大きな必要を認めることができない結果である。虚栄心と誇りが人々の心を満たしている。神の恵みだけが改革をなすことができる。

自分自身をへりくだらせ、神があなたをへりくだらせるまで待たないことが……あなたの働きである。神のみ手はときに、人々をへりくだらせ、ご自分の前において彼らを正しい位置に至らせるために彼らの上に重くのしかかる。しかし心を日毎に神のみ前でつねにへりくだらせている方が、どれほど良いことだろう。わたしたちは自分自身を低くすることもできるし、あるいは誇りのうちに自分自身を高めて、神がわたしたちを低くなさるまで待つこともできるのである。(教会への証 4 巻 378, 379)

9月19日

夕映えによって靈感を受ける

「しかし、聖書に書いてあるとおり、『目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた』のである。そして、それを神は、御霊によってわたしたちに啓示して下さったのである。御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである。」（コリント第一 2:9, 10）

太陽が雪を頂いた山の後ろを過ぎていき、天を染める黄金の柔らかい光線を残していった。言語に絶する美しさで混ざり合った色合いが深まり空の横に広がっていくとき、天の門が栄光の輝きを通すために開かれたように思われた。内にあるさらに大きな栄光を想像するようにとわたしたちの想像力を誘っているかのよう、黄金の色合いは刻一刻とさらに魅力を増していった。……

わたしたちには全天を越えた高い無限の神がおられる。しかしこのお方は柔和で悔いた霊を持つ者のうちに住むためにへりくだられた。天からの光線を見るのは、わたしたちが自分の目をこの世から転じるときである。信仰によって、世が与えることのできる栄光よりさらに卓越した栄光がわたしたちの感覚に明らかになるのである。ここではわたしたちは、神を愛する者たちに現されるもののかな光線しか見ることができない。

天がとても近く思われた。人の心を祝福し、慰め、喜ばせるためにその黄金の門から光が輝き出ているようであった。日暮れの目くらむばかりの栄光から目を転じたとき、わたしたちは信仰の目によって、もっと天のことは見るならば、全生涯の歩みを通じて、さらなる大きな光と、さらなる平安と喜びとが伴うはずであると思わずにはいられなかった。わたしたちはあまりにも地上の低地近くに目を留め、世俗的事柄のはかない見せかけの魅力を眺めているので、眺めることによってわたしたちは地上のものへと変えられるのである。もし信仰の目が将来の覆いを見通し、来るべき約束された命における神の愛と栄光の印を識別するために高められるなら、わたしたちはもっと霊的な考え方をするようになり、天の美しさと喜びがわたしたちの日常生活に混ざるようになるであろう。わたしたちはこの生涯におけるわたしたちの働きの忠実な遂行のために、またかなたのより高い生涯のために準備しているべきである。（サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1878年12月12日）

わたしたちは天、美しい天について語る習慣を身につけたいものである。神が生きる限り続く命について語るなら、あなたは自分のわずかな試練や困難を忘れるのである。（ヒストリカル・スケッチ・オブ・SDA・ミッション 146）

諸天のあらゆる神の栄光と、わたしたちの世にあるすべての美しいものは、与え主であられる神のご品性の正しい知識をわたしたちに与えるためにあるのである。（サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1878年12月12日）

忍耐の試練

「あなたがたは知らないのか。競技場で走る者は、みな走りはするが、賞を得る者はひとりだけである。あなたがたも、賞を得るように走りなさい。しかし、すべて競技をする者は、何ごとにも節制をする。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするが、わたしたちは朽ちない冠を得るためにそうするのである。」(コリント第一 9:24, 25)

勝利のうちにクリスチャンの行程を走るためには、ギリシヤやローマの競技や競走に参加する者たちのように、不屈の精神と忍耐と自己否定を働かせる必要がある。彼らのように、クリスチャンは自分たちの注意が観客にとらわれたり、あるいは娯楽や贅沢や安逸への愛着によってそらされたりするがままに許してはならない。彼の習慣と激情はすべて最も厳しい訓練のもとに置かれなければならない。神のみ言葉の教えによって啓発され、このお方の霊によって導かれた理性が、支配権を握らなければならない。すべての妨害物は捨て去られなければならない。どんな重荷も彼の進路を妨げてはならない。そしてこれらすべてがなされた上で、勝利を得るために最善の努力が必要とされているのである。

「彼らは朽ちる冠を得るためにそうするが、わたしたちは朽ちない冠を得るためにそうするのである」(コリント第一 9:25)。朽ちていく月桂樹の冠が、不朽の誉れと不滅の栄光の冠との最も顕著な対比のうちに、わたしたちの前に示されている。これらは勝利をもってクリスチャンの行程を走り、霊的な闘いにおいて勝利者となる者が受けるのである。熱意の衰え、あやふやな歩みがあつてはならない。さもなければ、努力は無駄になってしまう。競走における競技者の最後の数歩はいつも、スピードを衰えさせることがないように悲痛な努力をもって運ばれるのであった。同様にクリスチャンはゴールに近づくにつれて、彼の行程当初にもまさるより大きな熱意と決意をもっておし進まなければならない。

パウロは競技における競技者の努力に必要な準備―予備の訓練、注意深い節食、万事における節制―にもどって描写している。これらは地上の誉れという小さな報酬を勝ち取るためにひるむことなく実行されていた。自分の永遠の関心が危険にさらされているクリスチャンが、食欲と激情を、理性と神のみ旨に従わせるよう訓練されることは、さらにどれほど重要なことであろう。もし人々が世俗的名声という朽ちる報いを得るために、すすんで困難や不自由や自己否定に服するとすれば、クリスチャンはどれほどもつと喜んで、朽ちることのない栄光の冠を手に入れるために行い、苦しむべきであろうか。(パウロの生涯からのスケッチ 164, 165)

9月21日

耐えることができないほどの試練はない

「だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい。あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に会わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。」(コリント第一 10:12, 13)

試練は罪ではないし、また神がわたしたちにご不興をおぼえておられることを示唆するものでもない。主はわたしたちを試練に合わせられるが、すべての試練を量られ、そしてそれを、悪に抵抗し勝利するわたしたちの力に従って割り当てられるのである。わたしたちが自分の信仰がどの程度かを判定し、神に信頼し、また自分たちのクリスチャン品性がどれくらい安定したものであるかを評価できるのは、試みと試練の時においてである。もしわたしたちが簡単に揺さぶられ、打ち負かされるならば、わたしたちは警戒するべきである。なぜなら、わたしたちの力は小さいからである。(サイズ・オブ・ザ・タイムズ 1893 年 12 月 18 日)

敵の攻撃が鋭ければ鋭いほど、ますますイエスは近くに引き寄せてくださり、ますますこのお方の恵みがわたしたちに与えられる。……あなたが試練にあうように要求されるときはいつも、キリストの恵みを通して勝利を得ることがあなたの義務である。そしてあなたがキリストの力のうちに試練に耐えるとき、あなたは征服者なのである。心配することをやめて、あなたの祝福と特権を数え始めなさい。あなたの気質は試みられるであろう。あなたの忍耐はテストされるであろう。祈りだけが、また真剣な信仰があなたをクリスチャンらしく、これらを切り抜けさせるのである。わたしたちはキリストの学校にいる。わたしたちは、霊的麗しきのうちに日々成長すべきである。わたしたちは神の模範を模倣しようと努力しては、度々失敗するであろう。わたしたちは自分たちの欠点と過ちのゆえに、度々イエスの足元で泣くためにひざまずかなければならないであろう。しかしわたしたちは落胆すべきではない。もっと熱烈に祈りなさい。もっと完全に信じ、もっと断固とした決心をもってあなたの主に似た者に成長するためにもう一度努力しなさい。わたしたちが自分の力を信用しなくなるにしたがって、わたしたちは自分たちの贖い主の力を信頼し、賛美するのである。(レビュー・アンド・ヘルド 1888 年 8 月 7 日)

わたしたちは〔神の〕小さな子供たちであり、このお方はそのようにわたしたちを扱われる。わたしたちがこのお方に近づくとき、このお方は敵の攻撃からわたしたちを惜げ深く保護される。子供が両親に信頼するようにこのお方に信頼する者を、このお方は決して裏切られることがない。このお方はへりくだった、信頼する魂がこのお方に近づくのをごらんになり、憐れみと愛のうちに彼らに近づかれ、敵に対して彼らのために旗印を上げられる。「彼らに触れてはならない。彼らはわたしのものだからである。」とこのお方は言われる。わたしはわたしの手のひらに彼らを彫り刻んだ。このお方は彼らのために働かれるご自分のみ力に、絶対的な信仰を働かせるようにと彼らにお教えになる。(同上 1910 年 7 月 7 日)

真の愛

「このように、いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちで最も大きいなるものは、愛である。」(コリント第一 13:13)

欺瞞と偽りが世の中にある。そして、わたしたちは自分たちが真の愛を持っているかどうか知るために、わたしたちの心を厳密に吟味すべきである。真の愛は不信と悪の働きを生み出すことはない。それは処刑することがないようにと霊の剣の切れ味をにぶくしたりはしないのである。偽りの愛のもとに悪を覆うものは、罪人に「あなたは幸いである」と言う。神に感謝するのは、腐敗することのない愛があることである。上からもたらされる知恵があることである。それは(次に注意しなさい) 第一に清く、次に平和、寛容、温順であり、あわれみと良い実とに満ち、かたより見ず、偽りがないのであり、義の実は平和をつくりだす者の平和のうちに撒かれるのである。これは天で生まれ、天で育つ愛の描写である。愛は罪人を愛するが、罪を憎み、彼の危険について忠実に彼に警告し、彼に世の罪を取り除く神の小羊を指し示すのである。罪は覆われるべきではなく、取り除かれるべきである。天で生まれたその愛は、抵抗することのできない力であり、それは神との生きたつながりによってのみ得ることができる。あなたが人々の心を動かしたいのなら、愛の神と実際に接触しなければならない。あなたが他の人々を捕らえたいなら、神がまず始めにあなたを捕らえなければならない。(原稿 1 巻 217)

真の慈善とは自活できるように人を助けることである。人が家にきて食物を乞うとき、飢えたままで帰してはならない。その貧困は災難の結果であるかもしれない。しかし、真の慈善には単なる贈り物以上の意味がある。それは他人の幸福に真心から関心を持つことを意味する。わたしたちは貧しい者、悩んでいる者が何を必要としているかを理解するように努力し、彼らを最も益するように助けなければならない。思いやり、時間を費やし、個人的努力を払うことは、単に金銭を与えるより、はるかに多くの犠牲を要求する。しかしこれこそ最も真実な慈善なのである。

自分が受ける分で暮らしを立てることを教えられている人は、それを最大限に活用することをよりたやすく学ぶようになる。そして自立することを学んでいる人は、単に自活できるばかりでなく、他人を助けることができる人になるよう学んでいるのである。その機会をむだにしている人に、人生の義務の重要性を教えなさい。聖書の教えは人間を決して怠惰にするものではないことを示しなさい。キリストはつねに勤勉を奨励された。「なぜ、何もしないで、一日中ここに立っていたのか」となまけ者に言われた(マタイ 20:6)。「わたしたちは、わたしをつかわされたかたのわざを、昼の間にしなければならぬ。夜が来る。すると、だれも働けなくなる」(ヨハネ 9:4)。(ミストリー・オブ・ヒーリング 170, 171)

良い香りを放つ生活を生きる

「いっさいのことを、愛をもって行いなさい。」(コリント第一 16:14)

もしわたしたちの生活が聖なる香りによって満たされているならば、もしわたしたちが他の人々に対して良い思いをいだき、他の人々を祝福するための良い行いをするによって神に誉れを帰すならば、わたしたちが小屋に住もうが宮殿に住もうが重要ではないのである。環境は、魂の経験とはほとんど関係がない。わたしたちのすべての行動を彩るのは、抱いている精神である。神との平和また自分の同胞との平和を保っている人は、みじめになることがない。嫉妬は彼の心にはない。そこには悪意の入る余地がない。憎しみは存在することができない。神と調和している心は、この生活の悩みや試練を超越させられる。しかしキリストの平和がない心は、不幸で、不満に満ちている。その人はすべてのことに欠点を見とめ、この上ない天上の音楽に不協和音をもたらすのである。利己心の生活は、悪の生活である。心が自己愛に満たされている人々は、自分たちの兄弟に対する悪意を心にとどめ、神の器に反対して口を開くのである。サタンに促されてふつつと温められた激しい感情は苦い泉であって、たえず他の人々の生活を害するために苦い流れを注ぎ出している。……キリストに従うと公言する一人一人は、自分をより低く、そして他の人々をより高く評価しなさい。(教会への証 5巻 488)

生活を大いに美しく成功させるのは、世が小事と呼ぶ事柄に対して良心的に注意を払うことによってである。小さな愛の行い、ちょっとした親切な言葉、小さな自己否定の行為、小さな機会を賢明に用いること、小さなタラントを勤勉に培うことが、神の御目に偉大な人々とするのである。もしこれらの小事に忠実に注意を払い、またもしこれらの恵みがあなたのうちにあって溢れるならば、それらはあなたをすべての良い行いにおいて完全な者とするのである。

あなたがたの財産を惜しみなく自発的に神のみ事業に捧げるだけでは十分でない。このお方はあなたがたがすべての力を尽くして献身することを求めておられる。自分自身を捧げないことが、これまであなたがたの生涯の過ちであった。あなたがたの立場において神との密接な関係を保つことはとても難しいと考えるかもしれないが、こうしないならばあなたがたの働きは十倍も難しくなるのである。サタンは試練をもってあなたがたの道を取り巻くのであり、あなたがたが勝利を得ることができるのはただキリストを通してである。知的な職業において成功をもたらすのと同じ不屈の意志が、クリスチャンの進路において必要不可欠である。あなたがたはイエス・キリストの代表者とならなければならない。永遠の事柄が一時的な事柄よりも重要であるのと同様に、クリスチャン品性を完成するためのあなたがたの精力と根気強さは、他のことに従事する際に示されるものより、はるかに大きなものであるべきである。(同上 4巻 543)

他の人々を慰めるために慰められる

「ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神、あわれみ深き父、慰めに満ちたる神。神は、いかなる患難の中にいる時でもわたしたちを慰めて下さり、また、わたしたち自身も、神に慰めていただくその慰めをもって、あらゆる患難の中にある人々を慰めることができるようにして下さるのである。」(コリント第二 1:3, 4)

あなたの兄弟と近所の人々があなたに会うために来るとき、イエスの素晴らしい愛について語りなさい。失われた人類のためのこのお方のとりなしを喜びなさい。あなたの友人たちに、彼らがキリストの血によって買われたものであるがゆえにあなたが彼らの魂のために抱えている愛について語りなさい。わたしたちは、他の疲れた旅人たちの間違いを拡大したり、彼らの行動に対して裁きの座についたりすることによって、彼らの道をますます困難なものとするのが決してあってはならない。神は、わたしたちが孤独で落胆し過ちを犯した者の生活を元気づけるために、慰めと希望と勇気の言葉を語ることができるように、わたしたちを助けてくださる。互いに一つ思いとなり、ただ自分たちの兄弟の反対側にたつためだけに、意見を異にしないようにしよう。あなたはできる限りのすべての日光を他の人々の道に投げなさい。あなたがこうしてもなお、彼らにとってはまだまだ暗いことであろう。なぜなら、サタンが自分の暗闇をもって魂一人ひとりに押し迫っているからである。義の太陽の光線が、あなたの同胞である寄留者たちの上に輝くようにしなさい。……だれもなぜあなたはこの真理についてわたしに教えてくれなかったのですか。なぜあなたはわたしの魂を心にかけてくれなかったのですか。なぜあなたは世とその娯楽を非常に愛し、それらが悪いはずはないという印象をわたしに与えたのですか。なぜあなたは主に贖われた者たちが歩むためにしかれた道に歩いて、あなたの足のためにまっすぐな道を作らなかったのですか」と裁きにおいて立ち上がって言うことがないように、あなたの光がはっきりとしつかりとした光線のうちに輝き出るようにしなさい。(レビュー・アンド・ヘルド 1888 年 8 月 28 日)

わたしたちに対するこのお方の憐れみ深い取り扱いを思い起こしながら、神のみ前で心が優しさのうちに溶かされるようにしなさい。神の霊に、聖なる炎のように、心の扉に積まれたがらくたを燃やし尽くしていただき、イエスに入っていたきなさい。そうすればこのお方の愛が、優しい言葉と思いと行動のうちにわたしたちを通して流れ出るのである。(教会への証 5 巻 490)

自己の弱さ、悲しみ、痛みをあわれみ深い救い主に任せ、自分の心を開いてその愛を受け、その愛が他人にまであふれ出るようにしなさい。だれにでも耐えがたい試練があり、勝利しがたい誘惑があることを覚えていれば、こうした重荷を軽くしてあげることができる。……神の尊い約束を心に満たし、その宝の中から他人を恵み、慰め、力づけるような言葉を出せるようにすべきである。こうしたことが助けを与え、向上に導く雰囲気であなただけを包むようになる。周囲の人を祝福することを目標にしなさい。そうすれば自分の家族に対しても、また人に対しても助けとなる種々の方法が見いだされる。(ミストリー・オブ・ヒーリング 237)

漸進的な変化

「わたしたちはみな、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるのである。」(コリント第二 3:18)

わたしたちは自分たちの魂の価値を正しく認識する必要がある。そのときわたしたちは、今のように自分たちの行動方針に関して向こう見ずになることはない。わたしたちは最も熱心に神の道を知ろうと切に求めるようになる。わたしたちは利己心とは反対の方向にむかって働くようになり、またキリストの思いを持つことができるように、そしてわたしたちがこのお方に似た姿にかたちづくられ、形成されるようにというのがわたしたちの絶えざる祈りとなる。わたしたちがこのお方のみ姿に変えられていくのは、イエスを見て、このお方の素晴らしさをながめ、わたしたちの目をこのお方にしっかりと留めることによってである。このお方はご自分の道を守り、そのみ心を行い、真理のうちに歩むすべての者に恵みをお与えになる。(ビュー・アンド・ヘラルド 1890 年 12 月 23 日)

わたしたちの思いがキリストの無限の犠牲と、わたしたちのためのこのお方の仲保を深く考えることができるように、わたしたちは聖書をもっと学ぶ必要がある。キリストの言葉と、有限な人間の言葉を、同等に重視するようなことがあってはならない。心全体を神のみ言葉で満たしなさい。それらはあなたの燃えるような渇きを癒す生ける水である。それらは天からの生けるパンである。このパンからあなたは食べなければならず、それによってあなたは霊的にまた力において増進するのであり、わたしたちの主イエス・キリストの恵みと知識においてつねに成長するのである。……

心のうちで真理を望み、自分の生活と品性の上にその力が働くことを願う者は、確かにそれを得るようになる。そしてわたしたちの思いが神についての思想で満たされるとき、見えない世界の現実がわたしたちの理解力に明らかにされる。わたしたちの思いのすべての力が新しく新鮮な感銘の下におかれるようになる。わたしたちは真理についてより高くより聖なる見解を持つようになり、そして日毎にわたしたちのうちに変化が続けられていくのである。(ホーム・シヨナリ 1890 年 11 月 1 日)

わたしたちはどんな人間をも真似るべきではない。わたしたちの基準に足るような賢い人間はいない。わたしたちは人なるキリスト・イエスを見るべきである。このお方は義と聖の完全さにおいて完成されたお方である。このお方がわたしたちの信仰の創始者であり完成者であられる。このお方が模範なるお方である。このお方の経験が、わたしたちが得るべき経験の尺度である。このお方のご品性がわたしたちの型である。それならば、わたしたちは眺めることによってこのお方のみかたちに変えられることができるように、この生涯の当惑と困難からわたしたちの心を引き離し、このお方の上にとめよう。わたしたちは良い目的のためにこのお方を見上げることができる。わたしたちがこのお方をながめ、このお方について考えるときに、このお方が栄光の望みとしてわたしたちのうちに形成されるのである。(ビュー・アンド・ヘラルド 1905 年 3 月 9 日)

困惑してはならない

「わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。迫害に会っても見捨てられない。倒されても滅びない。いつもイエスの死をこの身に負っている。それはまた、イエスのいのちが、この身に現れるためである。」
(コリント第二 4:8-10)

キリストは、ご自分が代わって死なれた魂を決してお捨てにならない。人はキリストを離れ、試みに負けることもあろう。しかしキリストは、ご自分のいのちをもってその代償を払われた者からお離れになることはない。もし霊の目が開かれるならば、多くの魂が圧迫され悲嘆にくれて、ちょうど荷車が重い束を積まれて押しひしがれているように、死ぬばかりになっているのを見るであろう。わたしたちは、天使が、危機にひんしている、これらの試みられる者を助けるために、すみやかに飛びかうのを見るであろう。天からのみ使いたちは、これらの魂を取り囲む悪の勢力を押しかえし、彼らを導いて、その足を堅い基の上に置くのである。二つの勢力の間で行われる戦いは、この世の軍隊によって戦われる戦いと同様に現実的であり、そして〔この〕闘争の結果に……永遠の運命がかかっているのである。

わたしたちに対しても、ペテロに対してと同じく、次のことばが語られる。「サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った」(ルカ 22:31, 32)。神がわたしたちをお見捨てにならなかったことを神に感謝しよう。(祝福の山 147, 149)

わたしたちは今キリストを自分たちの避け所としなければならない。さもないとわたしたちの前途にあるかの日に、わたしたちの魂は暗黒と絶望で圧倒されてしまうことになる。人間の助けの及ばない点がある。闇の権力との一見致命的な接近戦を強いられるとき、すべての者は信仰によって生きなければならない。各自は自分自身で立つか、倒れるかである。破壊者の矢は、忠実な者たちに向けてまさに放たれようとしている。……しかしもしわたしたちの目が開かれるならば、彼らの上に何の危害も加えられないようにと、神のみ使いが義人を取り囲んでいるのを見るのできるのである。わたしたちは神にのみ信頼し、服従の道を進むべきであり、そうすることによってわたしたちは勝利を得るのである。

「義人は、信仰によって生きる」(ヘブル 10:38)。わたしたちはイエスを見、このお方のみ言葉を学び、このお方の霊を祈り求めるべきである。わたしたちは瞑想と祈りのうちに、もっとしばしば神と二人だけですごすべきである。もっと多く祈り、もっと語ることがを少なくしよう。わたしたちは自分自身の知恵、自分自身の経験、自分自身の真理の知識に頼ることはできない。わたしたちは毎日に学ぶ者となり、指導を天来の教師から求めなければならない。その後休息や快楽や便利さを考慮することなく、召されたかたは真実であることを覚えつつ、前進しなければならない。(レビュー・アノド・ヘルト 1883 年 8 月 28 日)

9月27日

目に見えないものへ準備する

「なぜなら、このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである。わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである。」(コリント第二 4:17, 18)

この地上はふさわしい者とされるための場所である。あなたには一瞬たりとも無駄にする時間はない。天においてはすべてが調和、平安、また愛である。不和も、争いも、非難も、愛情のない言葉も、曇った表情も、不快感もないのである。そしてだれでも平安と幸福にとって非常に壊滅的なこれらの要素の一つでも持っている者は、そこには紹介されないのである。……

この世のあわれな人生についてのあなたの不平を永久に止めなさい。かえって次のことをあなたの魂の重荷となさい。すなわち、いかにこれに勝る人生を確保するか、またいかに最後まで真実で忠実な者たちのために備えられたすまいの権利を確保するかである。もしあなたがここでまちがいを犯すなら、すべてが失われるのである。もしあなたが自分の一生を地上の宝を確保するために捧げ、天来のものを失うなら、自分が恐ろしい間違いを犯したことを発見するようになる。あなたは両方の世界を得ることはできない。「人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか」(マルコ 8:36)。……

〔この〕人生の試練はわたしたちの品性から不純物、弱さ、粗雑さを取り除き、わたしたちを栄光のうちにいる純潔な天の御使いの社会にふさわしいものとする神の職人である。しかしわたしたちがこれらの試練を経て、自分たちに苦悩の火が点じられるとき、わたしたちは目に見える火に目を留めていてはならない。そうではなく、信仰の目が見えない事柄、永遠の相続、不死の生命、永遠の重い栄光の上にとしっかりとどめられるようにしよう。そしてわたしたちがこうする間、火はわたしたちを焼き尽くすことはなく、ただ不純物を取り除く。そして、わたしたちは神性の印を身におびて七度精錬されて出てくるのである。(教会への証 1 巻 706, 707)

神は鋼鉄のように真実な心を持ち、誠実さにおいて堅く立ち、状況によってびくともしない者が、ご自分のみ事業において働くことを望まれる。試練と陰鬱のただ中においても彼らは、自分たちの見通しが望みによって明るくされたときや、彼らの外面的な環境がすべて自分たちの望み通りであった時とまったく同じなのである。……暗い地下牢において、残酷なネロから来るとわかつていた判決を待っているパウロは、アレオパグスの法廷において演説をしたのと同じパウロである。最も苦しい試練の時や最も落胆させる環境においてころごしの堅固な者は、神の光と恩恵が彼の上にあるように思われた繁栄のときとまったく同じである。信仰は見えないものに手を伸ばし、永遠の事柄をつかむのである。(同上 4 巻 448)

神の道を歩む

「わたしたちは、見えるものによらないで、信仰によって歩いているのである。」(コリント第二 5:7)

わたしたちは自己否定と自己犠牲の道において、わたしたちの主に従うべきである。わたしたちは最も安易な道を選ぶべきではない。わたしたちが歩むように要求される道は、生ける信仰を働かせることを必要としている。なぜならわたしたちが苦悩において喜ぶのも、わたしたちを囲んでいる道徳的暗黒に着実な光線を送るのも信仰によってだからである。(サイムズ・オブ・ザ・タイムズ 1892 年 3 月 28 日)

だれ一人として自分の道に不平をまくことによって、絶え間ない疑いのもてで恐れ震えながら進むべきではない。そうではなく、すべての者は神を仰ぎこのお方のいつくしみ深さを見、このお方の愛のうちに喜ぶべきである。あなたの困難に目を落とすかわりに、すべての力を奮い起こして見上げなさい。その時あなたは決して途中で気を失うことはない。あなたは間もなく雲の後ろにイエスを見、このお方があなたを助けるためにご自分の御手を差し出しておられるのを見るのである。そしてあなたがしなければならないことはただ単純な信仰のうちにあなたの手をこのお方にあずけ、このお方にあなたを導いていただくことである。あなたが信頼するようになるに従って、イエスを信じる信仰を通して、あなたは希望に満ちるようになる。カルバリーの十字架から輝き出ている光は、あなたに魂についての神の評価を明らかにし、その評価を正しく認識することによって、あなたはその光を世に反射しようと努めるようになる。人々のあいだの偉大な名は砂の上に書かれた文字のようであるが、非の打ち所のない品性は永遠にわたって保たれるのである。(教会への証 5 巻 578, 579)

あなたのために希望があることを喜ばなさい。ああ、喜ばなさい。主なるイエスに、聖なる感化、すなわちすべての激情を抑え、すべての不平の思いを沈黙させ、あなたの愛情を高め、あなたの心を清める感化が、あなたの生活にもたらされるようにと祈りなさい。……見上げなさい、見上げなさい。不信の洞窟から出てきて、神と共に立ちなさい。もしあなたが自分の試練を深く考え込むならば、あなたの人生は望みのないものとなる。もしあなたが影の彼方にあなたの唯一の望みであるイエスを見るならば、あなたは義の太陽の輝かしい光線を見るのである。

キリストの学校で柔和とへりくだりの教訓を学びなさい。このお方がどれほどわたしたちのために耐えられたかを自覚しなさい。そしてその時イエスのために耐えなければならないいくつかの試練があることを神の怒りの印としてみなしてはならない。もしあなたが神に信頼するならば、試練はいつも祝福であることが分かり、あなたの信仰はさらに輝かしく、さらに強く、さらに純潔になってあらわれるのである。サタンはつねにむりやりに魂に神を疑わせようとしているので、わたしたちはこのお方を信頼するようになり、思いを教育しなければならない。ヨブの妻が言ったように、サタンが、「神をのろって死になさい」と言うとき(ヨブ 2:9)、信仰と希望を語りなさい。もしあなたが神を信頼するなら、あなたはこのお方を信頼する理由をもっとみとめるようになる。このようにして思いはサタンが投じる陰のうちにではなく、義の太陽の輝かしさのうちに住むように訓練されることができるのである。(レビュー・アンド・ヘルド 1891 年 9 月 1 日)

9月29日

神のみこころに添うた悲しみの美しさ

「今は喜んでゐる。それは、あなたがたが悲しんだからではなく、悲しんで悔い改めるに至ったからである。あなたがたがそのように悲しんだのは、神のみこころに添うたことであつて、わたしたちからはなんの損害も受けなかったのである。神のみこころに添うた悲しみは、悔いのない救を得させる悔改めに導き、この世の悲しみは死をきたらせる。」(コリント第二 7:9, 10)

神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエス・キリストに対する信仰を、働かせなければならない。罪人がこの神の鏡を覗き込むとき、彼は罪の並々ならぬ罪深さを見、キリストのもとに駆り立てられる。神のみこころに添うた悲しみは、自分の弱さと墮落の認識の結果として生じるのである。(レ・ビュー・アンド・ヘラルド 1900年6月26日)

悔改めのない救いはいりえない。罪を悔改めない罪人は、だれも自分の心に信じて義とされることができない。悔改めはパウロによつて「悔いのない救を得させる悔改めに導く神のみこころに添うた罪に対する悲しみとして描写されている(コリント第二 7:10)。この悔改めは何もそれ自体には功績にあたる性質のものではないが、それはキリストを唯一の救い主として受け入れるように心をととのえるのである。……

罪人が律法を見るとき、自分の罪が明らかになり、彼の良心は痛感させられ、そして彼は有罪判決を受ける。彼の唯一の慰めと希望は、カルバリーの十字架を眺めることに見出される。彼が思い切つて約束をつかみ、このお方のみ言葉によつて神をつかむとき、彼の魂に安心と平安がもたらされるのである。彼は「主よ、あなたはあなたのみ子のみ名によつて来る者をすべて救われると約束されました。わたしは失われ、無力で、望みのない魂です。主よ、救ってください。さもないとわたしは滅びてしまいます」と叫ぶ。彼の信仰はキリストをつかみ、彼は神のみ前で義と認められるのである。

しかし神がキリストの功績を通して罪人を義認なさりながら、なお義であることがおできになる一方で、だれ一人として知っている罪を行い、または知っている義務をなおざりにしていながら、キリストの義の衣で自分の魂を覆うことはできない。義認が行われる前に、神は心の完全な明け渡しを要求される。そして人が義認を保つためには、愛によつて働き魂を清める活動的、生きた信仰を通して、絶えざる従順がなければならない。……人が信仰によつて義認されるためには、信仰が愛情と心の衝動を支配する点にまで到達しなければならない。そして信仰それ自体が完全なものとされるのは、従順によつてである。……

神性の恵みを通して超自然的な力が人に与えられ、思いと心と品性のうちに働くのである。罪がその憎むべき性質のうちに識別され、ついに魂の宮から追い出されるのはキリストの恵みが与えられることを通してである。(レ・ビュー・アンド・ヘラルド 1890年11月4日)

天の王国を勝ち得るための武器

「わたしたちは、肉にあって歩いてはいるが、肉に従って戦っているのではない。わたしたちの戦いの武器は、肉のものではなく、神を通して要塞をも破壊するほどの力があるものである。わたしたちはさまざまな議論を破り、神の知恵に逆らって立てられたあらゆる障害物を打ちこわし、すべての思いをとりこにしてキリストに服従させ。」(コリント第二 10:3-5 英語訳)

地上の王国は腕力によって設立され維持されてきたが、これはメシヤの王国の基礎となるものではなかった。このお方の政府の設立において、肉の武器は使われるべきではなく、何の威圧も実行されなかった。人の良心を強制するための何の試みもなされないものである。これらはやみの主権者が彼の王国の政府のために用いる原則である。彼の代理人は活発に働き、人間の独立心によってキリストの憐れみと慈愛に真っ向から反対する律法を制定しようとしているのである。

預言はキリストの王国の性質を明白に述べてきた。このお方は武力を用いない政府を計画された。このお方の臣民は圧制を知らない。地上の政府の象徴は野獣であったが、キリストの王国において人は寧猛な獣ではなく、神の小羊を見上げるようにと求められているのである。……このお方は苦しめられ踏みつけられた人類に、天の富んだ豊かな恵みをもたらすために、神なる回復者としてこられた。それはご自分の義の力によって、墮落し退化した人間ではあるが、神性にあずかる者になることができるためであった。(レ'ュー・ア'ンド・ハ'ラルド' 1896 年 8 月 18 日)

「誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい。心は熱しているが、肉体が弱いのである」(マルコ 14:38)。敵の密かな接近に対して見張り、古い習慣と生まれつきの傾向に対して見張りなさい。それらが現われてくることのないためである。思いを見張り、計画を見張りなさい。それらが自己中心にならないためである。キリストがご自分の血で買い取られた魂を見張りなさい。彼らに良いことをする機会を見張りなさい。(教会への証 6 巻 410)

今わたしたちは魂と骨髄から、肉の欲と食欲と激情を切り離すために主の剣を必要としている。ゆるんだ考えをいだがままに放っておかれた思いは変えらる必要がある。……考えは神の上に集中されるべきである。今こそ肉の心の生まれつきの傾向を克服するために熱心な努力をなすときである。

わたしたちの努力、わたしたちの自己否定、わたしたちの忍耐は、わたしたちが追及している目的の無限の値に比例していなければならない。キリストが勝利されたように勝利することによってのみ、わたしたちは命の冠を勝ち取るのである。(教会への証 8 巻 315)

研究 5

神の憐れみの最後の招き



「第三天使のメッセージそのもの」

信仰による義認とは何か?ということを前回見てきました。

それは、人にはできない神のみわざです。そして、「神にはおできになる」と信じるのが、信仰であり、義認を得させるのです。つまり、人にできることは、次の通りです。

受け入れ、信じるのが契約の彼のなすべき分である

「しかし、彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」(ヨハネ 1:12)。

「このように、あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのだから、彼にあつて歩きなさい」(コロサイ 2:6)

「もし人がこの大いなる祝福を正しく評価できるとすれば、それはその人にとってなんという利点であろう!彼には自分の魂を救う働きにおいて神との共労者となる特権が与えられる。受け入れ、信じるのが、契約の彼のなすべき分である。彼はキリストを自分の個人的な救い主として受け入れ、このお方を信じ続けるのである。これがキリストのうちに宿するという意味であり、彼のうちにいつでも、いかなる状況の下でも、彼の品性の表れである信仰—愛によって働き、魂をあらゆる汚れから清める信仰—を表す。キリストがこの信仰の創始者であり、このお方はそれを継続的に働かせることを要求しておられる。こうしてわたしたちは絶えず恵みの供給を受けるのである」(ビュー・アンド・ヘラルド 1900 年 4 月 24 日)

この中に「キリストの品性の表れ」である信仰とあります。これが、黙示録 14:12 にあるように聖徒たちの持っている「神の律法とイエスの信仰」であり、彼らの品性そのものです。

「わたしたちを、熱烈な信じる祈りによって、キリストとの緊密なつながりのうちに置くこと—これがわたしたちの義務である。なぜなら、わたしたちは契約の

自分の分について、責任があるからである。なぜなら、残りについては、わたしたちがこのお方のみ旨を行おうとする努力において、何が最も助けとなるかを知り、理解しておられるお方に信頼すべきだからである」(ザン・ウォッチマン 1903 年 6 月 25 日)

「キリストの言葉は、生けるすべての魂のために備えられる命のパンである。このパンを食べることを拒むということは死である。神のみ言葉にあずかることをなおざりにする人は、命を見ることがない。み言葉を受け入れるとは、み言葉を信じることである。そしてこれがキリストの肉を食べ、このお方の血を飲むことである」(ビュー・アンド・ヘルド 1896 年 1 月 14 日)

ここで、最初に見た内容と合わせて、整理してみましょう。

「神の憐れみの最後の招き」は、「第三天使の大いなる叫び」によって伝えられます。そしてその内容は「信仰による義認」なのです。

しかし、その第三天使のメッセージは、黙示録 14:9-11 に次のように記されています。

「ほかの第三の御使が彼らに続いてきて、大声で言った、『おおよ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、神の怒りの杯に混ぜものなしに盛られた、神の激しい怒りのぶどう酒を飲み、聖なる御使たちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。その苦しみの煙は世々限りなく立ちのぼり、そして、獣とその像とを拝む者、また、だれでもその名の刻印を受けている者は、昼も夜も休みが得られない』」。

いったいこの獣の刻印を警告している第三天使のメッセージが、なぜ「信仰による義認」のメッセージなのでしょうか？

ここで、神の戒め、すなわち十誡の内容を見てみましょう。それは大きく二種類のことが命じられています。「しなさい」と「してはならない」です。

この二種類は、はじめから人に与えられていましたが、罪の世では、植物界でもわかりますように、畑があると植えるべき野菜よりも、抜くべき雑草の方がよく育ちます。ですから、抜きなさい、すなわち「してはならない」が多く必要です。

しかし、はじめはそうではありませんでした。ですから、罪が入る前は、「しなさい」の方が多かったのです。

「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない」(創世記 2:16,17)。

この第三天使のメッセージは、全体をなす三重のメッセージの一部です。それは、第一天使のメッセージ(14:6-7)の「しなさい」で始まり、第二天使のメッセ

ージ (14:8) を経て、第三天使のメッセージ (14:9-11) の「してはならない」に至ります。

「してはならない」に対して、必ず「しなさい」があります。では、第三天使のメッセージの「しなさい」は何なのでしょうか。

「そして、今、神のしもべは彼の最後の厳粛な訴えを人々にした。彼は、言葉では表現できない心の苦しさをもって、避難所があるうちに救いを求めるように訴えた」(人類のあけぼの上巻 94)

「最後の厳粛な訴え」、すなわち最後の神の憐れみのメッセージである「第三天使のメッセージ」を伝える者は、非常な心の苦しさをもって「してはならない」と訴えます。その「してはならない」との訴えは、すなわちそれを避ける避難所があるうちに救いを求めよ、すなわち「しなさい」との訴えでした。

では、第三天使が警告している「獣の刻印を受けない」ためには、どうすればよいのでしょうか。

獣の刻印について詳しく書いてあるのは、その前にある黙示録 13 章です。

「地に住む者で、世の初めからほふられた小羊のいのちの書に、その名をしるされていない者はみな、この獣を拝むであろう」(黙示録 13:8 英語訳)。

「ほふられた小羊のいのちの書に、その名をしるされ」ること、これこそ、獣の刻印を受けない方法です!ここに下記の答えの鍵を見いだすのです。

「数名の人がわたしに手紙をよこし、信仰による義認のメッセージは、第三天使のメッセージかと問うてきた。そしてわたしは答えた、『それこそ、まさに第三天使のメッセージである』と」(レクテッド・メッセージ 1 巻 372)

「主はその大いなる憐れみのうちに、ワゴナー長老とジョーンズ長老を通して、ご自分の民に最も尊いメッセージを送ってくださった。このメッセージは世の前に上げられた救い主、全世界の罪のための犠牲をもっと顕著に提示するためのものであった。それは保証人(担保)を信じる信仰を通しての義認を提示し、神のすべての戒めへの従順のうちに表されているキリストの義を受けるように民を招いた。多くの人々はイエスを見失っていた。……すべての力がこのお方の御手のうちに与えられている。それはこのお方が豊かな賜物を人々に施し、ご自身の義という値のつけられないほど高価な賜物を無力な人間に与えることがおできになるためである。これこそ、神が世に与えるようにと命じておられるメッセージである。それは第三天使のメッセージであり、大声で宣布され、大規模なこのお方の御霊の注ぎが伴うべきメッセージである」(牧師への証 91, 2)。

「わたしたちの天の希望は、キリストだけに集中されなければならない。なぜなら、このお方がわたしたちの身代わりであり、担保だからである」(レクティット・メッセージ 1 巻 363)

「キリストだけに集中されなければならない」。第三天使が指し示しているのも、キリストです。その第三天使の大いなる叫びはいつ始まったのでしょうか?これからでしょうか?

キリストの義の啓示が大きくなるとき、神のご品性を徹底的に擁護したときに、テストがきます。

第三天使の大いなる叫びはすでに始まった……

「ほかの第三の御使が彼らに続いてきて、大声で言った……」(黙示録 14:9)。

「テストの時がわたしたちに迫っている。なぜなら、罪を許す贖い主、キリストの義の啓示のうちに、第三天使の大いなる叫びはすでに始まっているからである。これは全地をその栄光で満たす御使の光の始まりである。なぜなら、警告のメッセージを伝えられたすべての人の働きは、イエスを掲げること、すなわち型においてあらわされ、象徴のうちに影をうつし、預言者たちの啓示のうちに明らかにされ、み弟子たちに与えられた教訓や人の子らのためになされたすばらしい奇跡のうちに顕(あら)わにされたとおりに、このお方を世に提示することだからである。聖句を調べなさい。なぜなら、それらはこのお方を証するものだからである。……

もしあなたが悩みの時に耐えたいのであれば、キリストを知り、このお方の義という賜物を自分のものにしなければならない。この義をキリストは悔い改めた罪人に着せて下さる」(レビュー・アンド・ヘラルド 1892 年 11 月 22 日)

「弟子たちはイエスにお尋ねして言った、『いったい、律法学者たちは、なぜ、エリヤが先に来るはずだと言っているのですか』。答えて言われた、『確かに、エリヤがきて、万事を元どおりに改めるであろう。しかし、あなたがたに言うておく。エリヤはすでにきたのだ。しかし人々は彼を認めず、自分かつてに彼をあしらった。人の子もまた、そのように彼らから苦しみを受けることになるう』。そのとき、弟子たちは、イエスがバプテスマのヨハネのことを言われたのだと悟った」(マタイ 17:10-13)。

エリヤももう一人の御使も「すでに」きた、すなわち、すでに始まったとあります。

なぜ、第三天使の大いなる叫びは、獣の刻印ではなく、義の啓示によって始まったのでしょうか。

なぜなら、第三天使の大いなる叫びが、義のメッセージだからです。このことを見失ってはなりません。

罪を犯した者をあわれまれた神が表わされたのが、神の「義」なのです。

ノアもヨブもダニエルも「義人は信仰によって生きる」。これは、完全に神の憐れみによります。

弟子たちはバプテスマのヨハネのメッセージによってイエスに従ってきましたが、十分にそのメッセージを悟っていなかったために、マタイ 17 章の質問をしています。但し、彼らはイエスのみ言葉によって悟りました。つまり、イエスのみ言葉をそのまま受け入れました。

一方、イエスは「すでに来ている」というみ言葉を拒む者からは、「人の子も苦しみを受ける」と言われました。まさに、「彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受け入れなかった」（ヨハネ 1:11）。

では、すでに始まったのに、なぜ聞こえないのでしょうか。

「なぜなら、警告のメッセージを伝えられたすべての人の働きは、イエスを掲げること、すなわち型においてあらわされ、象徴のうちに影をうつし、預言者たちの啓示のうちに明らかにされ、み弟子たちに与えられた教訓や人の子らのためになされたすばらしい奇跡のうちに顕（あら）わにされたとおりに、このお方を世に提示することだからである」（ビュー・アンド・ヘルド 1892 年 11 月 22 日）。

それは、ただ一つ、キリストを掲げていないからです！

第三天使の大いなる叫びは、「イエスを世に提示する」ことによって聞かれるのです。

それにもかかわらず、かえって人の注目を将来の獣の刻印に集めることによって、ますますこの働きを遅らせるようなことが、このメッセージによって義認を受けた者にできるのでしょうか？

は自分の子供たちに、神さまがご自分の民を奴隷状態から解放してくださったそのやさしさについて物語りました。

いまや、キリストがご自分の弟子たちと共に祭を守るべき時がきました。そこで、このお方はペテロとヨハネに場所を探し、過越（すぎこし）の夕食の準備をするようにお命じになりました。

このとき非常に大勢の人々がエルサレムに来ていましたので、町に住んでいる人々は祭を守るためにきた訪問客のために、いつでも自分たちの家のへやをわたす準備ができていました。

救い主はペテロとヨハネに、通りに入って行くと水がめを運んでいる人に出会うであろうと言われました。彼らはこの人についていき、この人が行った家に入っていかなければなりません。そして彼らはその家の主人に言うのでした。

「弟子たちと一緒に過越の食事をする座敷はどこか、と先生が言っておられます」

そのときこの人は彼らの必要なものがそろった二階の広間を見せてくれるであろう。そこに彼らは過越の夕食の準備をするのでした。そしてそれらはすべて救い主が彼らに言われた通りに起こったのでした。

過越の夕食では弟子たちとイエスさまだけでした。彼らがこうした祭でこのお方と過ごした時は、いつも喜びの時でした。しかし、今このお方は思っている中で悩んでおられました。

ついにこのお方は心を動かされるような悲しい口調で彼らに言われました。

「わたしは苦しみを受ける前に、あなたがたとこの過越の食事をしようと、切に望んでいた。」

そのテーブルの上に新鮮なぶどう酒があり、このお方はさかずきを取り、感謝して言われました。「これを取って、互いに分けて飲め。あなたがたに言うておくが、今からのち神の国が来るまでは、わたしはぶどうの実から造ったものを、いっさい飲まない」（ルカ 22:11, 15, 17, 18）。

これはキリストがご自分の弟子たちと共に祭を守る最後の時となるのでした。それは本当にずっと守られてきた過越の最後でした。なぜなら、小羊が殺されたのは、キリストの死について人々に教えるためだったからです。そしてキリスト、つまり神の小羊が世の罪のためにほふられるとき、このお方の死を表す小羊をほふる必要はなくなるのでした。

きゅうりの韓国風サラダ

■ソース

塩	小さじ 1
しょうゆ	大さじ 1
梅はちみつのエキス*	小さじ 2
ごま油	小さじ 1
すりごま	大さじ 2
すりにんにく	1/2 片
とうがらしの粉	お好みで

*梅のはちみつ漬けを作って出てきたエキス。梅の季節に、はちみつ漬けを作っておくと梅ジュースのほか、お料理の調味料としても重宝します。梅酢とはちみつで代用できます。

■具材

きゅうり	2 本
もやし	1 袋

■作り方

1. ソースは材料をすべて混ぜておきます。
2. きゅうりは千切りにします。
3. もやしは根を取り、さっと湯通しします。
4. きゅうりともやしを合わせて、食べる直前にソースと和えます。

ソースは甘め、濃いめなど、お好みに合わせて調整してください。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究 : 14:00-15:00

【公開放送】 <http://www.4angels.jp>



聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理



お申込先 : 〒 350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係
是非お申し込み下さい。

書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



イエスの物語

第30話

過越(すぎこし)の夕食にて(1)

イスラエルの子らは、エジプトでの奴隷状態から解放されたときに、最初の過越(すぎこし)の夕食を食べました。

神さまは彼らを自由にすると約束しておられました。このお方は彼らにエジプトのすべての家庭で最初に生まれた子は殺されると告げておられました。

このお方は、死の天使が彼らを過ぎ越すように、彼ら自身の門柱に殺された小羊の血でしるしをつけるようおおせられました。

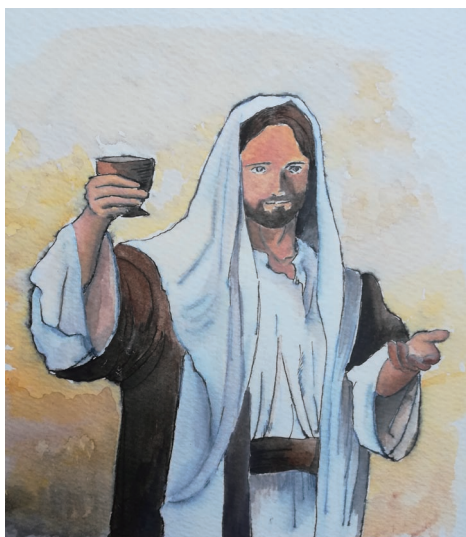
小羊のほうは、彼らが焼き、種入れぬパンと苦菜(にがな)、つまり自分たちの奴隷生活の苦しさを表すものと共に、夜食べなければなりませんでした。

彼らが小羊を食べるとき、旅の準備ができていなければなりませんでした。彼らは足にくつを履き、そして手にはつえをもっていなければなりませんでした。

彼らは主が言われたとおりにしました。そしてその夜エジプトの王は彼らに自由に行ってよいとの言葉を送ったのでした。

その朝、彼らは約束の地へ向かい始めました。

そこで毎年、彼らがエジプトを出た同じ夜に、すべてのイスラエル人はエルサレムにおいて過越(すぎこし)の祭を守ったのでした。そして自分たちの父祖がエジプトでしたように、この祭ではおのおのの家族が焼いた小羊をパンと苦菜といっしょに食べました。そして彼ら



(45 ページに続く)